センター模擬試験

夏講　国語

解説と解答

【国語】

【解答・採点基準】

（200点満点）

問題番号	設問	解答番号	正解	配点	自己採点
第1問					
問1	(ア)	1	③	2	
	(イ)	2	③	2	
	(ウ)	3	②	2	
	(エ)	4	②	2	
	(オ)	5	①	2	
問2		6	④	8	
問3		7	①	8	
問4		8	②	8	
問5		9	⑤	8	
問6	(i)	10	③	4	
	(ii)	11	①	4	
第1問 自己採点小計				(50)	
第2問					
問1	(ア)	12	①	3	
	(イ)	13	③	3	
	(ウ)	14	②	3	
問2		15	②	8	
問3		16	①	8	
問4		17	④	7	
問5		18	③	8	
問6		19	④	5	
		20	⑤	5	
第2問 自己採点小計				(50)	

※の正解は順序を問わない。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点	自己採点
第3問					
問1	(ア)	21	②	5	
	(イ)	22	⑤	5	
	(ウ)	23	③	5	
問2		24	①	6	
問3		25	⑤	7	
問4		26	②	7	
問5		27	③	7	
問6		28	④	8	
第3問 自己採点小計				(50)	
第4問					
問1	(1)	29	④	5	
	(2)	30	③	5	
問2		31	⑤	6	
問3		32	③	7	
問4		33	②	6	
問5		34	③	7	
問6		35	①	6	
問7		36	⑤	8	
第4問 自己採点小計				(50)	
自己採点合計				(200)	

【解説】

第1問　現代文

【出典】

『内山節著作集6　自然と人間の哲学』（一般社団法人農山漁村文化協会二〇一四年刊）所収の「関係から問うという姿勢」よりの出題。問題作成の都合上、途中に一部省略した箇所がある。

内山節（うちやま・たかし）は、一九五〇年東京生まれの哲学者。一九七〇年代から、東京と群馬県上野村を往復し、上野村では農業などをしながら生活している。現在、NPO法人・森づくりフォーラム代表理事。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授。主な著書に『山里の釣りから』、『時間についての十二章』、『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』、『内山節のローカリズム原論』、『新・幸福論』などがある。

【本文解説】

本文は、自然のあり方を「交通＝交流＝関係」という概念からとらえ、筆者の考える自然哲学のありようについて論じたものである。本文は空白行によって四つの部分に分かれている。それぞれの内容を確認していこう。なお、形式段落は1～19で表記することとする。

Ⅰ　客観的な対象としての自然（1～3）

ここでは、日本における一般的な自然のとらえ方について述べている。

筆者は、日本で「自然」についての議論がはじまるのは、一九七〇年代に入った頃からだと言う。一九六〇年代までにも環境問題についての議論はあったが、それらはたとえば「公害」といったかたちで問題になっていたのであり、「自然」それ自体が問われるようになるのは、「開発か自然保護か」が課題になりはじめた七〇年代以降である。自然を「開発」しようという主張と「保護」しようという主張は一見対照的なものに見える。しかし、経済発展のために自然を改造し「開発」しようとするのも、日本に残る「貴重な自然」を「保護」しようとするのも、ともに「自然を人間の外にある客観的な対象としてとらえる」という「欧米的な発想」に基づいたあり方である。「客観的な自然をいかに管理すべきか、という発想」から生じたものだという点で両者に相違はない、と筆者は考えている。

現代日本の自然認識

自然を客観的な対象としてとらえるという欧米的な発想

←

自然を開発するか保護するかという議論

Ⅱ　「交通＝交流＝関係」としての自然（4～7）

ここでは、自然認識の背後に価値判断や関係のとり方があることを述べ、筆者の自然認識や価値判断、自然との関係のとり方について論じている。

自然にはさまざまなとらえ方があるが、それは、意識的であれ無意識的であれ、そうした自然認識の方法には価値判断がともなっているからだと筆者は考えている。たとえば、自然を「経済的資源」として認識する人は経済の発展に価値を置いているのだろうし、自然を「生態系的世界」として認識する人は科学的なものの見方に価値を置いているのであろう。そして、現代は「科学によってみいだされたものが真理であるという近代のイデオロギー」に「支配」された時代であり、それゆえに「生態学的にとらえられた自然が客観的真理を表現しているようにみえる」のである。こうした価値判断は、対象との関係のとり方によって決まる。自然に対する価値判断は、自らが自然とどのように関わろうとしているかによって形成されるものである。

筆者は、「哲学がとらえようとする自然は客観的な存在ではない」と述べる。筆者は「自然を交通概念をとおしてとらえようとしている」のである。ここでいう「交通」という概念は、「交流」や「関係」という言葉で表現することもできる。筆者の考えでは、「私たちが生きる世界には、自然と自然

国語

の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通という三つの交通が成立して」おり、「この三つの交通はそれぞれが単独で成立しているわけではなく、相互的に干渉し合っている」。たとえば、人間と人間の交流から作られた社会的なシステムが、自然と人間の関係を変化させ、そのことが自然と自然の関係を変化させたりする。この三つの交通はそれぞれが変化しつつも互いに影響しあい、相互的な関係性のなかで複雑にからみあいながら変容していくのである。そのような関係の相互性からなる「交通概念」に価値を置くならば、確かに筆者のとらえようとする自然は、人間から自立して存在する「客観的な存在」などではない。筆者は、「交通＝交流＝関係がこの世界をつくりだしている」という観点から、自然をとらえようとしているのである。

生態系としての自然
近代のイデオロギー＝科学的なものが真理である
←
生態学的にとらえられた自然＝客観的な真理の表現

⇔

筆者の考える自然
世界は「交通＝交流＝関係」によって作られている
←
自然と自然の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通に価値を置く
・三つの交通は、相互的に影響しあいながら、複雑な関係性のなかで変化していく
←
自然を「交通」のなかで形成され変容するものとしてとらえる

Ⅲ　「関係」によって類として存在する人間（8～16）

ここでは、筆者が「関係」という概念を考えるようになった理由が述べられている。

ひとつめの理由は、筆者が群馬県上野村に長期滞在するようになったことにある。上野村は、「自然と人間が交通し、人間と人間が交通し合うなかに、村というひとつの共同体を形成している」。このような村に滞在するようになったことで、筆者は、**【本文解説】Ⅱ**で述べていたように、世界は「自然と自然の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通」という三者の相互的な関係と変容によって形成されている、と考えるようになったのである。

もうひとつの理由は、「この村での滞在と、かつて読んだ初期マルクスの文献が共鳴するようになったこと」である。どういうことか。

筆者は、初期マルクスの文献を読み、「〈人間は類的存在である〉というような言葉」に触れた当初、「フォイエルバッハの類概念を念頭においていた」。マルクスがこの文献の執筆に着手する少し前にフォイエルバッハの代表作のひとつが発表されており、それについて知っていたマルクスがフォイエルバッハの類概念を受け継いだのだと考えたためである。フォイエルバッハは、「人間の愛という本質が神となって外化し、人間を支配するようになる疎外の構造、あるいは自己疎外の構造を論述した哲学者」である。「疎外」という言葉は、一般に〈うとんじ、よそよそしくすること〉という意味をもつが、哲学では、〈精神や理念が自己の本質を否定して、自己にとってよそよそしい他者となること〉といった意味をもつ。つまり、ここでフォイエルバッハが言っているのは、人間は本質的に「愛」という性質を有しているが、それが人間の外部にある「神」という存在に仮託され、人間を支配するようになったことで、人間の本質であったはずの「愛」が人間にとってよそよそしい他者のような存在になってしまった、ということである。こうしたフォイエルバッハの考え方を踏まえてマルクスを読んだとき、傍線部**C**の前にある、「〈人間は本来は類的存在である。しかし資本主義という疎外された社会においては、個と類の関係が疎外された関係になる〉」というマルクスの記述は、フォイエルバッハの類概念を継承したうえで、人間を疎外する対象を「神」から「資本主義」へと置き換えたものだと思われたのだろう。ともあれ、フォイエルバッハは、「『理性と愛と意思の力』は人間の本質であ

り、この本質が人間の類としての存在を成立せしめる」と考えており、この類概念をマルクスは継承したと、筆者は考えていたのである。

しかし、後になって筆者は、「マルクスの類のとらえ方はもっと複雑であると気づかされる」ことになる。マルクスは初期に『マルクス経済学ノート』という文献を書いているが、そこに「生産そのものの内部での人間の活動の生産物のおたがいの間での交換も、ひとしく類的活動であり、類的精神である」といった記述が出てくる。そして、このような「類的」な精神をもち活動をする人間は、「真に共同体的な存在」であり、それは「人間の本質である」と記されている。これらを端的にまとめるならば、「人間は社会的な動物であり、さまざまな活動や交換などをとおして共同体的な存在として自己をつくりだす」ということになるだろう。これを筆者の言う「関係」という言葉を用いてさらに言い換えると、「人間はさまざまな関係によって自己を存在させる、その意味で類的、共同体的な存在だ」ととらえることができる。筆者は、マルクスの文献を読み進めるうち、マルクスは、「関係」「交通」といった営みが人間を類的な存在にすると考えていたと思うようになる。これは、〝「理性と愛と意思」という人間が生まれながらにもっている本性が人間を類として存在させる〟と考えているフォイエルバッハの類概念とは明らかに異なるものである。

筆者は上野村で、「自然と人間が交通し、人間と人間が交通し合うなかに、村というひとつの共同体を形成」するというあり方を体験した。このような村のあり方と、〝社会的動物である人間が他者とさまざまに「関係」「交通」することで、人間は共同体的な存在としての自己を形成する〟というマルクスの類概念が「共鳴」しあい、筆者は、「交通＝交流＝関係がこの世界をつくりだしている」と考えるようになったのである。

マルクスの文献を読みはじめた当初の筆者の考え

フォイエルバッハの類概念

・理性と愛と意思という人間の本性が、人間を類として存在させる

←

マルクスに受け継がれた

⇔

後になってからの筆者の考え

マルクスの考え方

・人間は社会的動物である

・他者とさまざまに関係しあうなかで、人間は共同体的（＝類的）な存在としての自己を形成する

（共鳴）

筆者の上野村での体験

Ⅳ　筆者の考える自然哲学（17～19）

ここでは、今までの論を踏まえ、筆者の考える自然や自然哲学のあり方がまとめられている。

【本文解説】Ⅲで説明したように、筆者はマルクスから触発を受けたこともあって「さまざまな関係を交通としてとらえていく」ようになり、またマルクスから「交通の変容が自然と人間の双方を変化させていくという考察」のヒントを得た。しかし、マルクスの考えに全面的に賛同しているわけではない。傍線部**C**の前に述べられていた、「〈人間は本来は類的存在である。しかし資本主義という疎外された社会においては、個と類の関係が疎外された関係になる〉」というマルクスの言葉を思い出そう。ここでマルクスは、資本主義社会を「疎外」された社会であるととらえ、人間の本来的なあり方として「純粋な『類的存在』を設定」している。筆者は、このような考え方を継承するのではなく、「自然も人間もすべては変容とともにある」と考える。もちろん、近代以降の自然と人間の世界をとらえるためには、近・現代の社会のさまざまなありようや近・現代人の精神の変化が、人間と人間の交通や自然と人間の交通、さらには自然と自然の交通をどのように変容させていっ

たのかを考察することが必要だ。しかし、筆者は、そうした時代の枠組みにとらわれてしまうのではなく、**【本文解説】Ⅱ**の前半に述べられていたように、さまざまな自然認識の背後に多様な価値判断や関係のとり方があることを踏まえ、「自然も人間もすべては変容とともにある」という発想をとりたいと考えている。

そのような筆者にとって、「自然哲学」はもはや「自然の考察という狭い枠に収まるものではない」。それは、自然と自然の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通という三者の関係をとおして、「自然と人間の双方を検討する分野」であり、「交通の変容をみることによって現代世界の構造を自然哲学の視点からとらえようとするもの」である。その意味で自然哲学は「人間学でもあり、ひとつの社会思想でもある」と言えるだろう。三者の交通のなかに存在し、三者が相互的に密接に影響しあうなかに自然は存在し、私たちの社会もまた存在するのである。

筆者の考える自然哲学

- 自然を客観的な存在としてとらえるのではない
- 「関係＝交通」をとおして自然と人間の双方を検討する
- 「交通」の変容をみることで、現代世界の構造をとらえようとする
- 人間学でもあり、ひとつの社会思想でもある

【設問解説】

問1　漢字の問題

(ア)は「唱える」と書き、〈人に先立って主張する〉という意味。①は「招待」。②は「温床」と書き、〈ある物事や思想などが生まれ育ちやすい環境〉という意味。③は「斉唱」で、これが正解。④は「賞金」。⑤は「考証」。

(イ)は「所産」と書き、〈産みだしたもの・作りだしたもの〉という意味。①は「散策」。②は「協賛」。③は「水産」で、これが正解。④は「三顧」と書き、「三顧の礼」は〈優秀な人材を迎えるときに取る、手厚い礼儀〉という意味。⑤は「遊山」と書き、「物見遊山」は〈見物して遊びまわること〉という意味。

(ウ)は「着手」と書き、〈とりかかること〉という意味。①は「首尾」と書き、〈始めと終わり〉という意味。「首尾一貫」は〈考え方や態度などが矛盾なく終始すること〉という意味である。②は「手腕」で、これが正解。③は「聴取」。④は「種子」。⑤は「殊勲」。

(エ)は「営為」と書き、〈いとなみ〉という意味。①は「鋭敏」。②は「設営」で、これが正解。③は「衛生」。④は「英雄」。⑤は「永住」。

(オ)は「検討」と書き、〈よく調べて考えること〉という意味。①は「検印」と書き、これが正解。ちなみに「検印」は〈書籍の奥付に、著者が発行部数を確認するために押す印〉のことを言う。②は「貢献」。③は「兼任」。④は「再建」。⑤は「顕微鏡」。

なお「ケントウ」は、〈目当て・見通し・予想〉を意味する「見当」、〈頑張って戦うこと・屈せずに努力すること〉を意味する「健闘」等の同音異義語がある。漢字の問題では、同音異義語と間違えないように文脈を確認して答えるようにしたい。

問2　傍線部の理由を説明する問題

まず傍線部の「それ」は、直前に述べられている、「日本でも」開始された「自然についての議論」を指しており、ここでいう議論は、前の段落の「開発か自然保護か」という議論である。この議論を筆者はなぜ「不十分なレベル」にとどまるものだと言うのだろうか。

傍線部の直後の、「開発を推進しようとする人々にとっては、自然は経済発展のための改造すべき対象にすぎなかったし、自然保護を唱える人たちも『貴重な自然』を守ろうと訴えるだけで終わっていた。……だがそう主張するだけで十分なのだろうか」という問題提起に注目しよう。筆者はこれに続けて、「自然を人間の外にある客観的な対象としてとらえるのは、

欧米的な発想にすぎない。ここから生まれてくるのは客観的な自然をいかに管理すべきか、という発想であり、『開発』も『保護』もこの発想から生まれてくる。結論は正反対になっても、自然を客観的な対象としてとらえる点では、両者に相違はない」と述べている。つまり、経済発展のために自然を「開発」しようという議論も、貴重な自然を「保護」しようという議論も、ともに「自然を客観的な対象としてとらえる」という点で不十分だということである（a）。では、このようなとらえ方がなぜ「不十分」なのか。

それについては、6・7で説明されていた。6で、筆者は、「私は自然を交通概念をとおしてとらえようとしている」と述べる。ここでいう「交通概念」とは、「自然と自然の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通という三つの交通」であり、この三つの交通は「それぞれが単独で成立しているわけではなく」、「人間と人間の交通によってつくられたシステムが自然と人間の交通を変え、それによって自然と自然の交通も変わっていく」というように、「相互的に干渉し合っている」ものである。とするならば、この設問で問われている、「開発か自然保護か」という議論に関しても、自然世界を人間社会から切り離して「客観的な対象としてとらえる」だけでは不十分であり、人間は自らと相互的に関わり合うものとして自然をとらえたうえで議論するべきであろう（b）。

なお、この点については、本文の最終段落でも、「はじめに述べたように、私が自然を人間の外にある客観的なものとして位置づけていない……」と繰り返されている。設問を解く際には、傍線部の前後だけを読んで安易に答えるのではなく、本文全体の論旨を踏まえたうえで解答の根拠となる箇所を確認しよう。

まとめると、次のようになる。

a　自然を開発すべきか保護すべきかという議論は、ともに自然を人間の外にある客観的な対象として位置づけている

b　右のようなあり方は、人間と自然の相互的な関わりを考察していない

以上の内容を適切にまとめている、④が正解である。

④以外は、bポイントが説明されていないという点で既に不適当であるが、その他の問題点についても指摘しておく。

①は、「自然についての議論が開始されたのは公害問題を解決するためであった」が誤っている。本文の1に述べられているように、「一九六〇年代までの環境問題」は「鉱毒事件」や「公害問題」であり、「『自然』の問題として議論されていたわけではなかった」。それらとは違って、「『自然』が問われるようにな」ったのは、「『開発か自然保護か』が課題になりはじめ」た七〇年代以降である。

②は、「自然を客観的な対象としてとらえる欧米的な発想」は「日本では受け入れがたいものだった」が誤っている。傍線部の次の段落にあるように、日本でなされていた「開発」か「保護」かという議論は、「客観的な自然をいかに管理すべきか」という「欧米的な発想」から生まれたものである。

③は、「理想的な自然を想定して保護しようという主張」が誤っている。傍線部の後に「もちろん『貴重な自然』は存在する」とあるように、自然を保護しようという主張は、現実に存在する「貴重な自然」を守ろうとしているのであって、現実にはない「理想的な自然」を「想定」（＝ある一定の状況や条件を仮に想い描くこと）しているわけではない。

⑤は、「開発」の立場と「保護」の立場とで「争いあうのは不毛なことだから」が誤っている。筆者は両者が争いあっていることを批判しているのではない。

問3　傍線部についての筆者の考えを説明する問題

傍線部の「自然をひとつの生態系としてとらえる」というあり方については、**【本文解説】**Ⅱの前半に説明がある。この設問で注意することは、傍線部自体の意味内容が問われているのではなく、傍線部についての筆者

の考えが問われているということである。そのことを踏まえたうえで、傍線部の文脈を確認していこう。

筆者は傍線部の前で、自然のとらえ方はひとつではなく、さまざまな「価値判断」に基づいた多様な自然認識の方法がある、ということを述べている（a）。そして、傍線部の後で、「自然をひとつの生態系としてとらえる」というあり方は、「科学によってみいだされたものが真理であるという近代のイデオロギー（＝歴史的・社会的立場に基づいて形成される、基本的なものの考え方）」に基づいた認識方法であり（b）、そのようなイデオロギーに「私たちの時代が支配されている」ために、「生態学的にとらえられた自然が客観的真理を表現しているようにみえる」と記している（c）。つまり、自然を生態学的にみるあり方は、近代のイデオロギーが通用している私たちの時代には「客観的真理」として支持されているが、近代とは「価値判断」の異なる時代・社会には通用しないという点で決して普遍的なものではない（c）。傍線部の次の段落（5）にも述べられているように、「自然をどのようなものとしてとらえるか」は自然との「関係のとり方」によってさまざまに異なってくる（a）。

まとめると、次のようになる。

a　自然のとらえ方は、自然との関係のとり方や価値判断によって異なり、多様である

b　自然をひとつの生態系としてとらえるというあり方は、自然を科学的に見るという近代のイデオロギーに基づいている

c　bのとらえ方は、現代においては客観的真理として支持されているが、普遍的なものではない

以上の内容を踏まえている、①が正解である。

②は、「科学を装っているところに欺瞞（＝人目をあざむき、だますこと）があると考えている」が不適当。bポイントで述べたように、これは科学的な見方に基づいたものであり、科学でないのに科学を「装って」いるのではない。

③は、「科学的真理に基づいているという点では妥当性があり評価できる」が不適当。b・cポイントで述べたように、筆者は、科学的真理に基づいているからといって必ずしも普遍的なものではないと考えているうえ、5の末尾に「哲学がとらえようとする自然は客観的な存在ではない」とあることからもわかるように、筆者は科学的な立場から自然を客観的に見ようとしているのではない。

④は、「自然を人間が克服すべき対象とするとらえ方と通じていると考えている」が不適当。傍線部の直前で筆者は、「自然を人間によって克服されるべき対象としてとらえる」という「価値判断」とは「逆に」生態学的なとらえ方があると述べており、5でも「自然を克服対象とする価値判断」と「自然を生態系としてとらえる価値判断」を別のものとして説明している。したがって、両者を共通するものとしてとらえるのはよくないだろう。

⑤は、「自然をさまざまな価値基準からとらえるようになった現代では、もはや有効性をもちえないものだと考えている」が不適当。b・cポイントで述べたように、現代は、自然を科学的に見るという近代のイデオロギーに支配されており、その点で、生態学的な見方を支持しているのである。

問4　傍線部について、筆者のその後のとらえ方を説明する問題

傍線部には「マルクスの本を読むようになってしばらくのあいだ」の筆者の考えが述べられているが、この設問で問われているは、「マルクス」と「フォイエルバッハ」の「関係」を、筆者が「その後」どのようにとらえるようになったのか、ということである。傍線部の後の文脈を丁寧に読んで、筆者の考えを整理していこう（詳しくは**【本文解説】Ⅲ**を参照のこと）。

まず、「フォイエルバッハの類概念」について。傍線部の次の段落

(12) に、「彼（＝フォイエルバッハ）にとっては『理性と愛と意思の力』は人間の本質であり、この本質が人間の類としての存在を成立せしめるものであった」と述べられている。フォイエルバッハは、人間が本来的にもっている「理性と愛と意思」という性質が、人間を類として存在させると考えていたのである（a）。そして筆者は、マルクスの本を読むようになった当初、「理性と愛と意思」ではないにせよ、人間の本来的な性質が人間を類として存在させるというフォイエルバッハの考え方が「マルクスにも受け継がれていたのだろう」と思っていた（13）。

しかし、後になって『マルクス経済学ノート』を読み、必ずしもそうでないことに気づかされる。マルクスは、「人間は社会的な動物であり、さまざまな活動や交換などをとおして共同体的な存在として自己をつくりだす」と記している（16）。人間は「社会的な結び合いのなか」で「さまざまな関係によって」自己を形成するという意味で、「類的、共同体的な存在だ」というのである（b）。このようなマルクスの考え方は、「『理性と愛と意思』という人間の本性が類的存在としての人間をつくるというフォイエルバッハの論述とは違う類概念」であると、筆者は考えるようになったのである（c）。これらの内容を整理すると次のようになる。

a　フォイエルバッハは、人間が生まれつきもっている本性が、人間を類として存在させると考えていた

b　マルクスは、人間は社会的な動物であり、社会のなかで他者とさまざまな関係を築くことで、類としての自己を形成すると考えていた

c　マルクスの類のとらえ方は、フォイエルバッハのそれとは異なっている

以上の内容を適切にまとめている、②が正解である。

①はまず、「理性と愛と意思が神によってもたらされた」が不適当。(12) にあるように、フォイエルバッハは「人間の愛という本質が神となって外化し、人間を支配するようになる」と考えていた。つまり、「理性と愛と意思」はもともと人間に備わった性質であり、それを人間の外部の「神」に仮託したと考えていたのであって、それらの性質が「神によってもたらされた」わけではない。また、「マルクスは……フォイエルバッハの類概念に影響を受けつつも」がcポイントから外れている。

③は、「マルクス」は「フォイエルバッハの類概念を継承しながら」、「理性や愛ばかりでなく社会のなかでの他者との結び合いも必要だと考えている」がcポイントから外れており、不適当。これでは、マルクスが、フォイエルバッハの類概念である「理性や愛」に加えて「社会のなかでの他者との結び合いも必要だ」と考えたことになるが、マルクスはフォイエルバッハとは異なる類概念をもっていたのである。

④は、「マルクス」は「フォイエルバッハの類概念の観念性を否定し、そのような誤った認識が資本主義的な経済社会におけるさまざまな問題を引き起こした要因であると鋭く批判している」が本文にまったく述べられていない内容であり、不適当。

⑤はまず、マルクスが「フォイエルバッハの類概念に疑問を呈し」が本文に述べられていない。また、「人間の本性は自らが生まれながらにして社会的な動物であることを自覚するところにこそある」がbポイントから外れている。マルクスは、人間が社会のなかで他者とさまざまな関係を築くところに類としての存在を見ていたのであり、社会的動物であるという「自覚」に重きをおいていたのではない。

問5　傍線部の意味内容を説明する問題

傍線部は「自然は交通とともに存在し、交通の変化によって変容していく存在である」というものであり、これは本文のテーマである筆者の自然についての考えを記したものである。本文全体の論旨を踏まえながら、傍線部の意味内容を明確にしていこう。

まず、(18) で筆者は、「自然も人間もすべては変容とともにあるというのが、私の発想である」と述べている。そして傍線部の前で、「自然哲学」

とは「関係＝交通をとおして自然と人間の双方を検討する分野」だと述べる。では、筆者のいう「変容」や「関係＝交通」とはどのようなものなのか。

それについての説明は、**【本文解説】Ⅱ**の後半を参照してほしい。5・6を振り返ろう。6の冒頭に「私は自然を交通概念をとおしてとらえようとしている」とある。ここでいう「交通概念」とは「自然と自然の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通という三つの交通」であり（a）、筆者は、「この三つの交通はそれぞれが単独で成立しているわけではなく、相互的に干渉し合っている」（b）と言う。5の末尾や傍線部の直前にもあったように、筆者は自然を「人間の外にある客観的なもの」と位置づけるのではなく、人間との相互的な関わりのなかでとらえようと考えている。そして、その相互的な関わりは、単に人間と自然との関係を指すだけではなく、「自然と自然の交通」や「人間と人間の交通」、すなわち、自然世界内部の関係性や人間同士の関わり合いとも密接に関係しあうものである（b）。たとえば、「人間と人間の交通によってつくられたシステムが自然と人間の交通を変え、それによって自然と自然の交通も変わっていくように」（6）、三者それぞれが変化しつつ、その変化が互いに影響を及ぼし関係し合いながら変容を続けていくということだ。傍線部に即して言えば、そうした三者が互いに複雑に影響しあい変化していくなかで、自然も変容していくということになる（c）。これらの内容を傍線部に即してまとめると次のようになる。

a　自然は、自然と自然の関係、自然と人間の関係、人間と人間の関係やそれによってつくられたシステムという三者の関係性のなかに存在する

b　右の三者は、それぞれが単独に存在するのではなく、相互的に影響を及ぼしあっている

c　自然は、右の三者が複雑に関わりあい変化していくなかで、そのあり方を変化させる

以上の内容がまとめられている、⑤が正解。

①は、「自然哲学」の変化を説明しているという点で、自然のあり方の変容について述べている傍線部からずれている。このように、設問の要求から外れた説明をしている選択肢を選ばないように注意したい。

②は、「人間がそうした自然を克服しつつも」が不適当。筆者は、aポイントで述べた三者の相互的関係性に注目しているのであり、人間が自然を「克服」することを求めているのではない。

③はまず、「自然の世界」は「つねに人間社会の影響を受けて成立している」が、人間社会から自然界への影響という二者の一方向的な関係にしか触れていない点で、不十分である。選択肢の後半も、人間の「自然に対する認識の仕方」の「変化」について述べており、自然のあり方の変容について説明するというcポイントから外れている。

④は、「かつて」あった「自然」と「人間」との「交流」が「近代になり」失われた、という説明になっている点で、傍線部の内容から外れている。傍線部で説明されているのは筆者の自然観である。

問6　この文章の表現と構成について説明する問題

(i)　本文の二箇所の波線部の表現上の特徴が問われている。それぞれの文脈を確認しよう。

波線部**X**は、日本で一九七〇年代に入って議論になった、「貴重な自然」を「保護」しようという主張について述べられたものである。そこで、筆者がこの主張に対してどのように考えているのかを確認する。筆者は、3で、自然保護という主張は「自然を人間の外にある客観的な対象としてとらえる」という「欧米的な発想」から生まれたものだと述べ、5で「哲学がとらえようとする自然は客観的な存在ではない」と、この発想に否定的な立場を表明している。つまり、波線部**X**は、疑問文の形をとっているが、最初からこの主張を否定しようという意図に基づいて書かれたものであり、「反語」（＝断定を強めるために、言いたい内容の肯定と否定を

反対にし、疑問の形にした表現）になっているということがわかる。

波線部Yは、直前の7で述べられている、「自然」を「交通＝交流＝関係」という観点からとらえるという筆者の主張を受けて、「なぜ……『関係』なのか」と問題提起をしている。これは、本文のテーマに関わる問題提起であり、この内容については本文の最終段落まで説明がなされている。

したがって、それぞれの表現上の特徴としては、次のようにまとめることができる。

X　疑問文の形をとっているが、反語になっている

Y　本文のテーマに関わる内容について問題提起をしている

以上の内容がまとめられている、③が正解である。

①は、Xについて「筆者自身も明確な結論が出せていない問題」としている点が不適当。右に説明したように、筆者はXの主張に対して否定的な立場を明示している。また、Yを「問題点」としている点も不適当。Yは筆者の考えを踏まえたものである。

②は、Xについて「ここでの『主張』を補強する論を述べるための契機」としている点が明らかに不適当。筆者はこの主張に対して否定的な立場を表明している。また、Yを「疑問点」としている点も不適当。Yは筆者の考えを踏まえたものである。

④は、YよりもXに「注目を集める工夫が施されている」としている点が明らかに不適当。逆接の接続詞「だが」を用いたからといって、「注目」を集めようとしているとは断定できないし、そもそも筆者の主張に関わるという点ではむしろ、Yの方により注目すべきであろう。

(ii)　文章全体の構成が問われている。詳しくは**【本文解説】**Ⅰ～Ⅳを参照してほしいが、ここでは、文章全体の論理展開を確認しよう。

Ⅰでは、現在の日本において、自然が客観的な対象としてとらえられていることが述べられていた。このようなとらえ方を筆者は否定的に見ている。したがって、ここでは現在の問題点が示されている。

Ⅱでは、Ⅰに対して、自然を「交通＝交流＝関係」としてとらえるという筆者の自然認識や価値判断が説明されていた。ここでは、筆者の考えが述べられている。

Ⅲでは、Ⅱで示したようなとらえ方を筆者がするようになった理由として、上野村に長期滞在したことと、上野村での滞在とマルクスの文献が共鳴したことが述べられていた。したがって、ここでは、Ⅱの論を深めている。

Ⅳでは、ここまでの論を踏まえて、筆者の自然観を確認するとともに、筆者にとっての自然哲学とはどのようなものかが説明されていた。したがって、この部分は結論と考えられる。

以上の内容をまとめている、①が正解である。

②は、最初の部分と最後の部分を「一般論」、第二の部分と第三の部分を「それについての具体的な話題」と説明している点が不適当。右に述べたように、第二の部分と第三の部分は、最初の部分の一般論を具体化しているのではなく、最初の部分の考えとは対立する筆者の考えを述べている。

③はまず、最初の部分を「全体の主旨」としている点が大きく外れている。また、第三の部分と最後の部分について「新たな話題を論じる」としている点も明らかな間違いである。

④はまず、「第二の部分と第三の部分で観念的な議論を展開し」が間違っている。筆者は群馬県の上野村に実際に長期滞在した体験に基づいて自分の考えを述べているのだから、「観念的な議論」だと決めつけることはできないだろう。また、最後の部分は、第二の部分や第三の部分で述べられていた筆者の考えをまとめている部分であり、「再び現状を詳細に分析する」とは言えない。

第2問　現代文

【出典】

遠藤周作の小説『留学』からの出題。『留学』は三章からなる。それぞれの章ごとに主人公も時代も異なっており、その点では三部作といってもよい。各章に登場する三人の留学生がいずれもヨーロッパの文明文化の壁に挑んで格闘するが、宗教や文化の違いによって挫折していく姿を描いている。今回出題したのは第三章「爾(なんじ)も、また」の一節である。ただし、設問作成の都合で、一部省略した箇所がある。

遠藤周作（えんどう・しゅうさく）は、一九二三年東京生まれの小説家。幼くして父の転勤に伴って中国（当時は満州）の大連に移り、その後両親が離婚したため母について帰国し、神戸の伯母の家に同居する。その伯母の影響でカトリックに入信した。一九五〇年、留学生として渡仏。帰国後発表した初の小説『アデンまで』が一部で高い評価を受けたのち、次作『白い人』で芥川賞を受賞。以後『海と毒薬』『沈黙』『深い河』など、日本人がカトリックを信仰することの葛藤や苦悩をテーマに宗教的な思索を深める作品を数多く残した。一九九六年没。

【本文解説】

本文は、留学先のパリに到着したばかりの「田中」が、日本人の集まる店に行き、そこで彼より先に同地に来ていた日本人たちと出会って議論を交わし、ホテルの自室に戻ってから自らのあり方を自問する姿を描いている。

作品の舞台は一九六〇年代のパリである。大学入試センター試験での出題作品は明治のものから現代のものまでと幅広い。普段からさまざまな作品に触れ、読み慣れておくことが大切である。また、本文の長さが負担になった人もいるだろう。しかし近年の大学入試センター試験では相当量の長文を読むことが求められているので、今後の学習上の一つの課題として、限られた時間で長文を正確に読み解いていくということを意識するきっかけとしてほしい。

本文は、その内容から大きく三つに分けることができる。以下、その内容を確認していこう。

Ⅰ　小説家「真鍋」との言い争い（冒頭～「……煙草をふかしていた。」まで）

本文に先立つリード文にある情報をきちんと確認してから本文の読解に入ろう。「田中」は同じ留学生「向坂」に連れられて日本人が集まるキャフェに向かっている。留学してきたばかりの「田中」にとっては、当地の日本人社会になじんでおくことは大切なことであろう。

「田中」はそこで旧知の「小野」から声をかけられる。「向坂」がその名を口にしていたことからも、パリの日本人社会ではそれなりに知られている存在であるようだ。「小野」はH大学の助教授であり、「田中君」「御苦労さんでした」と語りかけて「周りの者に、自分が一階級上だということを示すため」に「まるで研究室の中でのように椅子に腰かけたまま鷹揚に（＝ゆったりと落ち着き払って）うなずいてみせ」る。

「小野」が「田中」を紹介すると、いきなり「また、外国文学者か、やりきれんね」という男がいた。小説家の「真鍋」である。「真鍋」は酒に酔っているらしく、この発言には「からむような調子」が感じられた。「真鍋」は「ストックホルムでのペン・クラブ会の帰りに巴里にこられた」と紹介される（「ペン・クラブ会」とは、世界各国の作家・文筆家が表現の自由の確立や、国境を越えた相互理解と連帯を求めて設立された国際ペンクラブのこと）。「真鍋」が国際的な会合に参加する地位や権威のある存在であるからこそ、横にいた青年は「甘えるよう」な態度を取り、「小野」も「卑屈な笑いをうかべて」、「真鍋」に阿(おもね)って（＝相手の機嫌を取って気に入られようとして）いる。

その「真鍋」は、「小野」と「やりあ」っており、その流れのなかで「また（「小野」と同じ）、外国文学者（の登場）か、やりきれんね」と発言するのである。「真鍋」は「田中」に対して、「外国文学者というのは何者だね。

一体お前さんたち（外国文学者）と文学との間には、どんな関係が成立しとるのかね。小説家のように、切っても切れない関係があると言うのかね」とたたみかけるが、その発言からは、外国文学者と文学との関係について「真鍋」が懐疑的であることが読み取れる。さらに外国文学者は「他人のフンドシで角力をとって」いる（＝一番大事なものを人から借りて勝負をしている）だけの「無責任な解説者」、つまり肝心の「文学」は自前で書くわけではなく、人の書いた「文学」を拝借して「無責任」に解説、批評しているだけだと指弾する。

「田中」はその「真鍋」の言葉の調子を、日本の「文士」（＝文学者）が日本の飲み屋で外国文学者をつかまえてなじるのと同じだと感じた。先ほどの「小野」の態度といい、今の「真鍋」の言葉といい、彼等の言動から「田中」は、パリに来てまで日本にいるときと同じような気分を味わっているのである。

一方、「田中」よりパリ生活が長く、世知に長けている「小野」は「たくみに相手（＝「真鍋」）のほこ先、つまり攻撃を「田中」に「向けさせ」て、「田中」に返答を促す。先に「閉口する（＝困る）」と言っていたように、酔った「真鍋」に手を焼いていた「小野」はこれ幸いと「田中」にその相手をさせようとしている。ここからは、人間関係においてうまく立ち回っている「小野」の様子が読み取れる。

「真鍋」は「田中」に対し「一度も文学に体を張ったことがないくせに」とさらにからんでくる。「体を張」るとは（自分の身を犠牲にするつもりで、懸命に事に当たる）という意味であり、ここでは小説家（芸術家）である自分は創作に自らの存在を懸けて取り組んでいるという矜持（きょうじ）（＝誇り）を表したものと考えられよう。しかしその言葉がまた、「田中」に日本の雰囲気を思い出させる。「田中」は留学先でしか学べないことや感じられないことを期待して来たはずである。ところが来た早々、日本の飲み屋同然の雰囲気の中で、日本と同じように「小野」からは格下に扱われ、小説家からは批判される。その内心はおもしろいものではなかっただろう。

「田中」は「真鍋」の言葉を受けて、「ぼくらが何も作品を創れないということですか」と答える。その時「田中」は「自分に注がれている若い画家たち」、つまりパリ生活の先達の視線を気にしている。「田中」の声が小さかったのは、パリでは新参者でもあり、小説家の「真鍋」の威光にも遠慮していたからであろう。逆に「真鍋」は大声で言う。「創らない者（＝外国文学者）に、創る者（＝作家・芸術家）の哀しみや苦しさがわかるか」と。彼が言いたいのは、わかるはずがあるまい、それをわからない外国文学者は自分たち芸術家には及ばないということだ。「日本人の若い画家たち」も「真鍋」同様に自らを「作品を創る芸術家」であると考え、創作を放棄した外国文学者に対しては「優越感」を抱いて「冷笑」している。

「田中」は反論を試みる。「何を創ったかということが大切なんです」。「つまらん小説」を書いただけで「創る行為の優位を誇るのは意味がない」。「小説家」は大勢いるが「存在価値があるのは、傑作を書いた時だけ」であると。この時「田中」は「自分の声が興奮のために上ずっていくのを感じ」ている。一方で周囲にいた「小野」の「当惑」と、「若い画家たち」の「敵意」も意識している。自分の言動が周囲の人にどう映っているか理解しながらも、興奮から抗弁をやめられない。

「真鍋」は、「日本の作家や批評家たち」は「仏蘭西の作家にくらべると、はるかに劣ると言いたいわけだな」と「田中」を挑発する。「田中」はそれを受けて「言ってはならぬ言葉」をついに口に出してしまった。「（日本の作家はフランスの作家に比べ）はるかに劣ります」。「真鍋さんの代表作だって、この国の一流に比較すれば三流作品でしょう。この国では今の真鍋さんでも、まだ本当の作家として通用してないかも知れません」。ここには、はっきりと日本の小説家（日本で一定の地位を築いている「真鍋」であっても）に対して、外国文学の優位を信じている「田中」の姿が表れている。「真鍋」は「その酷評は素直に受けとる」と言う。ただ、「真鍋」は「田中」の批判を受け止めることで逆に度量の大きさを示して「強が」ってみせていることに注意しよう。「その顔はひきつっ」ているとあるように、実際は痛

いところを突かれたのである。「真鍋」は、「創作」の苦悩を知る小説家は外国文学者よりも優位であると主張しながらも、日本の小説はヨーロッパの文学にはとても及ばないという「田中」の指摘に対しては抗弁できないからこそ、強がるしかなかったのである。

「真鍋」は「田中」の反論は「問題をすりかえ」ただけだと言い返す。「真鍋」は再度「田中」に自分の身を反省してみろと問う。「君は俺のように創らないかわりに、文学に何を賭けているかね」。それに対し「田中」は、「たとえば……傑作を飜訳しようと思います」と答える。「たとえば……」という表現には、即答できない「田中」の姿がうかがえる。三流の作品を創造していると「真鍋」を批判した「田中」ではあるが、創造しない自分が目指すべき道をはっきりと確信を持って見すえているわけではないという点も読み取っておこう。

「真鍋」は言う。「飜訳」とは「血のかよった（＝ここでは命を懸けている、というほどの意味）人間の言葉を九官鳥のようにまねする」ことである。外国文学者は自分が「九官鳥」のように人まねしかできないことを自覚して、その「悲しさや辛さ」をかみしめながら生きていてほしい、と言う。だが「日本の外国文学者には、それが一向ない」、つまり安穏として生きているだけではないかと批判してみせる。ついに「田中」は「高い声で怒鳴っ」てしまう。「ぼくら（＝外国文学者）に九官鳥としての寂しさや哀しさがないとあなた、どうして断定できるのですか」。その怒鳴り声は一座を白けさせる。酒の入った「真鍋」の言葉を受け流すことができず、本気で言い返す新参者。それまでの空気が一変した。

「真鍋」はその白けた空気に気づき、磊落な（＝細かいことにこだわらない快活で器量の大きな様子）笑い声を作りその場を納めようとする。「小野」に向けて「田中」のことを「サムライ（ここでは勇気をもって難敵に挑んだ者、というほどの意味）」と評し、和解するふりをしてみせる。さしのべられた「真鍋」の手を握る「田中」は、「屈辱的な哀しみのこみあげてくるのを感じた」。「真鍋」が「田中」を誉めてみせることは、「真鍋」の大人ぶりを強調することになるからだ。

「俺は失敗した」。パリに到着するなり、当地の日本人の前で「出すぎた（＝自分の分を越えて差し出がましい言動をとる）まねをした」。新参の身でありながら、酒に酔った小説家と本気で言い争い、機嫌を損ね、その場の空気を白けさせた。それが身の程知らずな言動であったことを、「田中」は「不快そうに横眼でちらっと見た小野の顔色」で理解した。

「小野」は「真鍋」の機嫌をとるように「河岸（かし）を変える（＝他の店で飲み直す）」ことを提案し、「田中」を冷たく見下ろすと、そっけなく出て行った。若い画家たちも「田中を黙殺したまま」立ち去る。その人々の背中には「新参者のくせに生意気な」という気持ちが感じられた。「田中」はパリでの交際のスタートからつまずいてしまった。

この場面での「真鍋」の主張を確認しておこう。

「真鍋」の主張

- 外国文学者は自力では作品を作らず、他人の作品を勝手に批評したり翻訳したりするだけの存在である
- 小説家（芸術家）は創作の苦しみや哀しみを背負いながらも創作に命を懸けている
- だから外国文学者は小説家には及ばない存在である
- 外国文学を翻訳する者は言葉の意味もわからず口まねする「九官鳥」のようである
- 外国文学者は右のような自己のあり方を謙虚に自覚して、その辛さや悲しみを感じながら生きていくべきだ

それに対する「田中」の考えも確認しておこう。

「田中」の考え

- 傑作を創ってこそ小説家（芸術家）には存在価値があるのであり、ただ創っているというだけで自らの優位を誇ることはできない

・日本の小説家（芸術家）はヨーロッパの芸術家と比べるとはるかに劣る
・外国文学者である自分は、「九官鳥」的なあり方の悲しさや寂しさを自覚している

Ⅱ　「向坂」との会話（「どうも……あなたにまで迷惑をかけて」～「……眼をしばたたきながら、うなずいた。」まで）

「田中」は「向坂」がわざわざ日本人の集まるキャフェを紹介してくれたのに、そこでいきなり波風を立ててしまい、結果として紹介者である彼の顔に泥を塗るようなことをしてしまった。謝罪する「田中」に「向坂」は「（今の失態を）気にしなさんな。小野さんは君をかばっただけ」だからと慰めともとれる言葉をかける。ただ、「向坂」の見方と違い、「田中」は「小野」が彼をかばって「真鍋」を連れ出してくれたとは思っていない。「田中」のいない場所で彼のことを「困った」人間なのだと言って、自分の立場を守るために弁解してみせているだろうと想像している。先ほど「田中」が「小野」の不快そうな一瞥（いちべつ）を見たことを思い起こそう。

「向坂」は、パリにいると誰もが「心身の疲れや、色々な人間関係のウルサさのために」「妙に神経が刺々しくなる」ものであり、それは「田中」だけのことではないと言う。「その上、外国にくると日本人同士には職業的な競争心や嫉妬心が起きるのも、特徴」であるとして、「向坂」自身も「一番いやなのは、巴里の日本人のこの競争心」であり、自分は「一人で生活する」、つまりパリの日本人社会からは距離をおいて生活することにしたのだと言う。今「田中」が巻き込まれたのは、まさに文学や芸術に関わる職業意識をもつ日本人同士の競争心や嫉妬心からくるいさかいであった。それから離れて生活することもできる、という話を「田中」はそれでも「哀しそうに眼をしばたたきながら、うなずい」て聞いた。「向坂」はこの話を「自分に言いきかせるように」呟く。彼にとっても自身が実感している留学生活の難しさを改めて確認させられたできごとであったのだろう。

ここでは、それまで「田中」が話していた日本人たちとは異なる「向坂」の考えや態度を読み取っておこう。

Ⅲ　自室での自問自答（「ホテルまで二人は……」～最後まで）

そのまま二人は黙って帰途につく。そして夜の挨拶だけを残して「向坂」も廊下に消えた。一人「とり残された」「田中」がたどり着いた部屋は「暗い灯の中で」わびしく感じられた。パリ生活のスタートで大きな失敗をしてしまった「田中」には転がっていた風呂敷包みとトランクが「みじめに」見えた。「キャフェでの失敗」の中でも一番気がかりなのは、同じ専門であり、これからもいろいろと交流を持つに違いない「先輩の小野に冷やかな眼で見られてしまったということ」である。さらに「限界をこえた振舞いを、前からここに居る日本人たちの前でやってしまった」自分がこれから「どういう眼でみられるかは想像できる」、つまり好意的に受け入れてもらえるとは思えない。今後の生活を考えると、大きな後悔の念が「田中」の心を苦しめる。

しかし、「田中」が「真鍋」に言った、〈日本の現在の小説家は到底ヨーロッパの作家には及ばない〉というのは、本心であった。彼は日本の小説家のほとんどを心中で軽蔑していたし、それは日本の外国文学者のほとんどに共通した感情でもある。ただその「正直な気持」は日本では決して口にはしないのが「外国文学者の習慣」であった。「小野」からすればその暗黙の約束事とも言うべき習慣を破った「田中」の方に非があるということだろう。そんな失敗を犯してしまったのは、パリまで来た疲れから「自分の神経がとがっていたため」かもしれないと「田中」は自分を省みる。

一方で「なにも創らん者に、創る者の辛さがわかるかい」という「真鍋」の台詞は、「単純で愚劣」であると「田中」は考えていた。そして、その言葉に対して自分を抑えることができず、つい反論してしまった。冷静に自分を振り返ってみると、自分に「それを笑って聞きながすほどの信念」がないことに気づく。さらにここで「田中」は、自分でも学生時代には小説家を志していたことを想起する。一度は「創る」ことを志したもののそれを断念し

た「田中」の「つくらないという劣等感」は今も「全く消えていなかった」。

誰もいない部屋で「田中」は「真鍋たち」に向かって叫ぶ。「毎月の文芸雑誌にのるあんたの作品の辛さとは一体なんですか」と。毎月出版される雑誌に載せられる程度の軽い作品を創っている「真鍋」が誇っていた「創る者の哀しみや苦しさ」などいかほどのものか、というその反論は、しかし、創作をあきらめた田中の強がりに過ぎないともいえる。だからその声は誰にも届くことなく「空虚な部屋の中で消えて」いくしかないのである。

その時、「田中」は文豪プルーストの臨終を思い出す。プルーストはその生涯のほとんどを大作『失われた時を求めて』に費やし、結局その完成を遂げることなく亡くなった作家である。彼は「田中」が今いる、まさにこのホテルで、死ぬ間際まで大部の著作に手を入れ、自らが臨終間際に感じた苦しさを執筆中の作品に取り入れるために、死の床で女中に筆記させたという。「田中」は思う。まさに命を懸けて創作に取り組んだプルーストのような生き方こそが「創る者だ」と。軽い作品を量産している「真鍋」とは違う、真の創造者であると思う。「田中」は、自分の部屋の壁に、プルーストの執念が蝙蝠のような影としてこびりついているように感じた。この部屋で昨夜から自分が息ぐるしく感じてきたのは、そのようなプルーストの執筆に対する執念が記憶としてあったからかもしれない。

だが、そうやって身を削り命を懸けて創作された作品を、外国文学者はただ「九官鳥」として「口まねをして訳したり紹介している」だけだと言う「真鍋の酷評」が「田中」にはこたえる。なぜならそれが「多分に（＝たいていの場合）」、日本の外国文学者にとって事実だということを「田中」自身が知っていたからである。窓の外は、「城塞の厚い壁のように眼の前に立ちふさが」る闇だ。そして「この闇の奥に幾百、幾千のプルーストのようなすさまじい執念がひそみ、わめいているような感じ」を「田中」は抱く。「創るものの執念」を感じた「田中」は自分たち「外国文学者」にどのような存在意義があるのか、次第にわからなくなっていくのである。

この場面にいたって、「田中」がⅠの場面で興奮して小説家である「真鍋」と激論を交わした背景が明らかになる。

「田中」が「真鍋」に対してつい本音を吐露してしまったのは、

- 創作を断念したが故に、創作者に対して劣等意識がある
- 外国文学者がただ口まねをしているだけの存在であるというのは事実である
- だからそれしかできない自分に対して、情けなさや悲しさを抱いている

という、「田中」自身の弱さをつかれたからであるだろう。

ここでは、先ほどのキャフェでの「田中」の言動の背景にある事柄や、同じホテルに滞在していた文豪の創作態度を思い出し、それに圧倒されて自分のあり方に迷いが生じてくるまでの「田中」の心情を丁寧に読み取っておこう。

小説の読解では、最後まで読んでみて初めて出来事の意味や心情が理解できることも多い。途中でよくわからないと感じる時も、最後まで一読して全体を理解していくことを心がけたい。

【設問解説】

問1　語句の意味を答える問題

大学入試センター試験の小説問題では、語句の意味を問う問題が必ず出題されている。これは基本的に〈辞書的な意味〉を問う知識問題である。語句の辞書的な意味を確認したうえで、本文の文脈も踏まえながら、確実に解答するようにしよう。日頃から語句そのものの意味をきちんと理解していくように辞書を活用しながら準備しておきたい。

(ア)の「鷹揚」とは、**【本文解説】**でも触れたように〈ゆったりと落ち着き払っている様子〉。したがって①が正解である。他の選択肢はどれも「鷹揚」の語義から外れている。②の「ぞんざい」は〈物事のやり方がいい加減であらっぽい〉という意味である。

(イ)「閉口する」は〈どうにもならないで困る・どうにも手に負えない〉

という意味。したがって③が正解である。残りの選択肢には〈困り果てる〉という意味がないので除外できる。

(ウ)「白けた空気」では、「白ける」の意味が問題となっている。「白ける」とは〈興が醒める・盛り上がっていた気分に水を差される〉といった意味であり、②が正解である。①・④・⑤には〈面白がり盛り上がっていたのにその雰囲気がなくなる〉といったニュアンスがない。③についても、「落ち着いた」だけでは、それまであったその場の盛り上がりが消えていくというニュアンスがないので間違いである。

問2　発言を踏まえて人物像を説明する問題

傍線部は、「真鍋」が外国文学者を批判して発した言葉である。設問は「このように言う『真鍋』」について問うている。したがって、この傍線部だけを見るのではなく、このような発言に至った「真鍋」の考えや人物像を丁寧に確認して行くことが必要である。

まず、「真鍋」は自らを作品を「創る者」、「田中」たち外国文学者を「創らない者」であると言っている。その上で、「創る者」である小説家は作品に「体を張っ」ているのに対し、外国文学者は「他人のフンドシで角力をとってる」とその違いを述べている。**【本文解説】**でも触れておいたように、「真鍋」には、自分たち小説家はその作品の創造に全身全霊を懸けて格闘しているという誇りがあるのである。一方で「創らない者」すなわち外国文学者については、人の作品を無責任に批評しているだけであると見下している。そして、傍線部にあるように、そのような外国文学者に、全身全霊を懸けて創作している者の苦悩は理解できない、と言うのである。

以上の点を踏まえてこの発言について整理しよう。

a　「真鍋」には小説家として創作に全身全霊を懸けて格闘しているという自負（＝プライド・誇り）がある

b　「創る者」はその創作活動の中で「哀しみや苦しさ」を味わっている

c　「創らない者」は他人の作品を無責任にあれこれ批評しているだけである

d　そのような「創らない者」に創作上の悲哀や苦悩は理解できるはずもない

こうした四つのポイントを踏まえている②が正解である。

①は、「真鍋」が「芸術の都パリに芸術とは無縁の学者ばかりが次々と留学してくることに苛立つ」としている点が本文中に書かれていない。また傍線部のような発言から「ただ外国文学を研究するだけでは留学する意味がない」という考えも読み取ることができない。

③は、「真鍋」が「日本文学の優越性を信じている」という点が本文とは矛盾する。「真鍋」は「田中」に自分がフランスの作家にはとうてい及ばないと言われた時に、「その酷評は素直に受けとるとしよう」と答えたことを考えると、「日本文学の優越性を信じている」とは言い難い。

④は、「芸術を享受する者」に対する希望や期待を述べている点で、間違いである。ここで「真鍋」は外国文学者を批判しているのである。

⑤は、「真鍋」が「田中」など外国文学者について「人生経験の浅い人間」であると考えていたとは本文から読み取れないし、人生経験が浅いから「真の芸術はわからないと考えている」とも言えないので、間違いである。「真鍋」は「創らない者」には芸術を創作する上での苦悩や悲哀が理解できないと言ったのである。

問3　傍線部における心情を説明する問題

「田中」が「俺は失敗した。」と、自分の失態を自覚した時の心情を説明する問題である。設問に「この時の」とあるので、まずはこの時の状況を確認しておこう。

「田中」は「真鍋」とのやりとりを重ねるうちに、次第に興奮してきている。最初は遠慮がちに小声で話していたが、「真鍋」に「田中」たち外国文学者より「創る者」として格闘している自分たちの方が優越している

と言われ、「自分の声が興奮のために上ずっていく」のに気づいている。そして周囲の視線を意識しながらも、「懸命に」抗弁をしていた。そしてそこで言ってはならない一言、つまり、〈日本の小説家はフランスの一流にはとうてい及ばない〉と言ってしまう。

さらに、「飜訳」者は「九官鳥」さながら口まねをするだけなのに、そのことの哀しさを感じていないと「真鍋」に言われて、「田中」は「高い声で怒鳴っ」てしまう。この時一座が静まりかえり、自分が座を白けさせてしまい、さらに「出すぎた」まねをしたことに気づくのである。まずは、「田中」が知らず知らず興奮して口にしてはならなかったことを言ってしまったことをおさえておこう。

それでは、この場でうまく振る舞えなかったことを、どういう点で「失敗」だと捉えているのか。傍線部の直後に、「巴里に到着早々、俺はここの日本人たちの前で出すぎたまねをした」とあることに注目しよう。「田中」は留学生の「向坂」に連れられて「日本人が集まるというキャフェ」であるこの店に来た。そこにはこれから留学生活を始める「田中」がうまくこの地になじめるようにという「向坂」の配慮があったと考えられる。しかし、この時「田中」は「出すぎたまねをした」。新参者としての分を守り、「真鍋」らパリでの生活の先輩たちの話を大人しく聞き、この場で無難に振る舞えばよかったのに、言わずもがなのことを口にし、「小野」をはじめとして居合わせた人々の不興をかってしまった。「小野」や「若い画家たち」の当惑や敵意に気づいていながら、感情的に振る舞ってしまったことで、今後周りの日本人たちと自分の関係に悪影響を及ぼすことが察せられ、後悔していると考えられる。

ここでのポイントをまとめてみよう。

a　留学してきたばかりの「田中」にとって、当地の日本人社会とうまくつきあうことは大切である

b　「真鍋」の挑発するような言葉をうまく受け流せず、次第に興奮して本心を口にしてしまった

c　新参者の分を越えて生意気なことを言い、先住者たちとうまく関係を築けなかった

d　その失敗を後悔している

以上の四点を的確に踏まえている①が正解である。

②は、aやcのポイントに触れていない点で不十分である。また、「有名な小説家である真鍋と親しくなる好機だった」という点が本文からは読み取れない。

③も、②と同様にaやcのポイントが説明されていない。また、「パリに来てまで日本にいた時と同じように不毛な文学談義に熱中する周囲の者たちに苛立」つという点が本文からは読み取れない。失敗の内容を「結局は妥協し握手までかわしたこと」に限定している点もおかしい。

④も、aやcのポイントから外れているうえ、「田中」に「芸術についての自分の考えを冷静に論じるつもり」があったとしている点、そして「論敵に付け入る隙を与えてしまい、言い負かされたこと」を失敗の内容としている点がそれぞれ間違っている。

⑤は後半の「他の誰よりも大切にすべきだった先輩の小野との関係を損ねてしま」ったとしている点が本文の内容から確定できない内容となっている。確かに「小野」との関係についてⅢの箇所で「田中」は悩んでいる。しかし、「小野」との関係が「他の誰よりも大切にすべきだった」とまでは言えない。

問4　本文全体から人物像を読み取る問題

この設問には傍線が引かれていないので、「小野」がどのような人物として描かれているかを本文全体から読み取らなければならない。「小野」が登場する箇所をチェックして、「小野」という人物を正確に把握しよう。

まず冒頭での「小野」であるが、自分が「田中」より「一階級上だということを示すため」に鷹揚に振る舞っている。さらにうまく立ち回って

「田中」に酒に酔った「真鍋」の相手をさせることに成功している。

「田中」と「真鍋」の言い争いで一座が白けた時には、「真鍋」の機嫌を取り持ち、次の店に行こうと提案して、その場を取り仕切っている。そのことを「向坂」は「田中」をかばうためだと言ったが、「田中」自身は彼の不快そうな冷ややかな視線を感じており、その場を取り繕うための行動だと考えている。また、次の店で「小野」は、自分のことを批判して、「真鍋」や若い画家たちの機嫌を取り、うまく立ち回っているだろうと、「田中」は想像している。

ここでのポイントを整理しておこう。

a　自分の優位を確保して示そうとしている

b　手を焼いていた人間の相手をうまく他人におしつけている

c　その場の空気を察知して、対処している

以上の三点をきちんとまとめている④が正解である。「権威的な振る舞いを見せる」がa、「周囲の雰囲気を敏感に感じ取」るがc、そして「巧みにその場を取りしきる世知に長けた面もある」がbのそれぞれのポイントに当たる。なお、「世知」とは〈世渡りの知恵〉と言う意味である。

①は「小野」が「自らの体面を何よりも大切にし」ていたという点や、「自分の権威を見せつけるために」「後輩を利用することも辞さない」という点が、本文からは読み取れない内容となっている。また、b・cのポイントを踏まえず、ただ単に「利己的な人物」としている点も不適当である。

②は、「小野」の態度を「居丈高（＝人を威圧するような態度）」としている点が、まず間違い。「小野」は「鷹揚に」振る舞って自分の優位を強調してはいても、威圧的に振る舞ってはいない。さらに「後輩をかばうような優しいところのある人物」という説明も、「田中」が「小野」の冷たい視線を感じ、次の店で自分を批判していると思っていることを踏まえると、適当とは言えない。

③は、「自分の認めた相手には安易に迎合する（＝相手の意向を汲んでそれに合わせる）」、「意に染まない相手に対しては必要以上に厳しく当たる」という内容が本文からは読み取れない。「小野」が「真鍋」のことを認めているかどうかはわからないし、「田中」についても、その出すぎた振る舞いを見て冷たく突き放したことは読み取れるが、それをもって「好き嫌いの激しい人物」とするには無理がある。

⑤は、「日本の芸術を発展させる」という目的意識を持って「研究者と芸術家との間を巧みに取りもとうとする」としている点が本文からは読み取れない。「小野」が芸術家に対してどのような態度を取っているかはわからない。なお「老成した」とは〈経験を積んで大人びていること〉という意味。

問5　傍線部における人物の「内面」を説明する問題

傍線部は「田中」の心の声である。心の中でこの台詞を発した時の「田中」の内心を説明することが求められている。

まず、傍線部の指示語「それ」の内容を確認しよう。作家プルーストの臨終にまつわるエピソードを思い出した「田中」は、死の間際まで創作に執念を燃やして苦闘した姿を思い、「それ」こそが「創る者」の真のありようだと感じている。（a）

「創る者」とは、キャフェで「真鍋」が口にした言葉である。「真鍋」は自分たち小説家は「創る者」であり、辛さや苦しみを味わいながら「体を張っ」て創作と格闘していると誇っていた。しかし「田中」はそんな「真鍋」について、「毎月の文芸雑誌にのるあんたの作品の辛さとは一体なんですか」と一人叫んでいる。プルーストの苦闘に比べ、「三流作品」を毎月量産している「真鍋」などは「創る者」とは言えないと考えているのである。（b）

しかし「田中」は、創作を断念した劣等感をぬぐい去ることはできず、また外国文学者として傑作の翻訳に取り組もうとは考えているが、それが

他人の作品を口まねしているに過ぎないという「真鍋」の指摘は事実であると感じてもいる。「田中」は「創る」ということをめぐって、外国文学者である自分のあり方がわからなくなっている。（c）

以上のポイントを踏まえて選択肢を検討していくと、③がこれらすべてを的確に説明しており正解となる。

①は、「真鍋」が「日本の文壇でしか通用しない論理を振りかざ」しているという点が本文からは読み取れず、また、「研究者としての自分が……と決意を固めている」としている点が、本文の末尾で「田中」に迷いが生じていることと矛盾する。

②は、「自分は小説を書く才能がないと痛感し」て、「それまで完全には諦めきれずにいた創作の道を断念せざるを得ない」と考えたとしている点が、本文の内容とは異なっている。「田中」は学生時代に小説家を志した時期があったというだけで、この時「創作の道を断念」したわけではない。

④は、「真鍋」について「毎月作品を雑誌に載せることに汲々（＝一つのことだけに精力を奪い取られて、他のことを顧みる余裕のない様）としている」としている点が、本文から確定できない。むしろ「田中」は、臨終まで創作に全身全霊を傾けたプルーストに比べ、「真鍋」が毎月雑誌に載る程度の作品を軽く量産していると考えているのである。また、「自分は、文学に携わる資格がないのではないかと自問し」ているのではなく、外国文学者としての自分がどうあるべきなのかわからなくなっているので、この点も間違いである。

⑤は、「真の創作者とは言えない」「真鍋」より、「研究者として世界的な傑作を翻訳することに取り組む自分の方がよほど文学の発展に寄与していると自負している」という点が間違い。④と同じく、「田中」が外国文学者としての自分のありようが見えなくなっていると述べている本文の内容とは全く異なっている。

問6　本文の内容と表現について答える問題

近年の大学入試センター試験では、〈本文の内容や表現〉についての説明を求める設問が頻出している。本文と照らし合わせながら、選択肢を丁寧に吟味して、正誤を判断していこう。

①について。確かに「真鍋」は「君」「あんた」「貴様」と「田中」に対する呼び方を変えているが、そのことが「真鍋の田中に対する評価が大きく揺らいでいる」ことを示しているわけではない。「真鍋」は一貫して外国文学者の存在を認めてはおらず、呼称の変化を評価の揺らぎと結びつける根拠はない。

②について。そもそも「擬人法」とは、人でないものをあたかも人のようにたとえる比喩の一種である。ここでの「九官鳥のように」や「ずっとサムライだな」という表現は「田中」を他のものにたとえて言われたものである。だから「擬人法を用いて」いるわけではない。

③について。「文学的な議論にはまったく無関心な画家たちの姿が表れている」としている点が間違い。彼らは「田中」が「真鍋」と話していた時「田中」のことを注視していたし、「真鍋」の言い分に同意して「田中」を冷笑したり、「田中」の抗弁を敵意のこもった眼で見たりし、「田中」が怒鳴り声をあげてからはよそよそしい態度をとるなど、終始、「田中」と「真鍋」のやりとりに注意を払っていた。

④について。「向坂」だけが他の日本人とは異なった態度で「田中」に接していた**【本文解説】Ⅱ**の場面を思い出してみよう。「向坂」は「気にしなさんな」と声をかけている。その流れの中で「あなただけじゃないですよ」という言葉には、苦境にある「田中」を慰める意図があっただろうし、またその言葉は「自分に言いきかせるように」発せられたのであり、それが「パリで留学生活を送ることの難しさを痛感している向坂自身のありよう」を表していると言うことができる。これが**一つ目の正解**である。

⑤について。本文には「小野」「真鍋」「若い画家たち」と、「様々な立場から芸術に関わっている複数の人物を主人公の周囲に配置」している。

そして彼らとのやりとりを通して「田中」は外国文学者としての自分のありように思いをめぐらせていくのである。したがってこれが**二つ目の正解**である。

⑥について。本文では「真鍋」の「芸術観」に対して、「小野」と「田中」の「芸術観」を一組にくくれるものとして「対照的」に描いてはいない。特に「小野」が芸術や創作についてどのような考えを持っているのかは具体的には何も書かれていないので、「小野」の「芸術観」の内容もわからない。したがってそれにより「作品世界に重層性をもたせている」とも言えない。

第3問　古文

【出典】

『栄花物語』巻第五・浦々の別

成立　全四十巻のうち、正編三十巻は一〇三〇年頃、続編十巻は一一〇〇年頃に成立したかとされるが未詳。

ジャンル　歴史物語

作者　正編は赤染衛門、続編は出羽弁とする説や、全編を赤染衛門とする説があるが未詳。

内容　歴史物語の最初の作品で、五十九代宇多天皇から七十三代堀河天皇までの十五代、約二百年間の歴史を編年体（＝年次順に記す形式）で記しているが、史実と一致しない内容もある。物語の中心は、藤原道長が権勢の座につくまでの経過とその後の繁栄の記述で、紫式部の『源氏物語』の影響を色濃く受けているため、物語性は豊かであるといわれるが、道長礼讃に終始し、批判精神に欠けるともいわれる。同時期に成立した歴史物語の『大鏡』も、ほぼ同じ時代のことを扱っているが、紀伝体（＝人物の伝記を記す形式）で記されている点や、大宅世継と夏山繁樹という二人の老人の回想に若侍が応じるという形をとり、複数の人物の視点によって登場人物や時代への批評がなされる点など、『栄花物語』とは異なる部分が多く、両書はよく比較される。

今回の本文は、小学館刊『新編日本古典文学全集』に拠るが、読解の便宜を図って、諸本に拠り、一部表記を改めるなどしている箇所がある。

【本文解説】

今回の本文は、長徳元（九九五）年、花山院に矢を射かけ、それがきっかけで筑紫に配流されていた藤原伊周が、罪を許されて帰京を果たす場面である。

まず、本文に至るまでの場面を説明しておこう。

伊周の父である関白藤原道隆亡き後、様々な出来事があり、権力は父の弟の道長に移っていた。そんな中、伊周が事件を起こす。伊周は、藤原為光の三女のもとへ通っていた。花山院は、為光の四女に求愛をしていたのだが、伊周は、花山院が自らの通う三女に恋慕していると誤解し、弟の隆家とはかって、花山院に矢を射かけた。また、伊周が、臣下には禁じられている秘法を行ったり、一条天皇の母で、自身の叔母にあたる詮子を呪詛（じゅそ）しているという噂が流れたこともあり、それらの処罰として、翌長徳二（九九六）年、伊周は筑紫に、隆家は出雲にそれぞれ配流されることと決まったが、詮子が二人の罪を軽減するよう道長に訴えたこともあって、伊周は播磨、隆家は但馬と、当初の配流地よりは都に近い土地に留め置かれることになった。ところが同年の秋、伊周は、病の重くなった母を心配するあまり、ひそかに都に戻り、母と妹の中宮定子に対面する。そのことが露見し、あらためて筑紫へと配流されてしまった。この配流の間に都では、母の逝去、中宮定子の脩子内親王出産、再びの懐妊、そして敦康親王出産と、たて続けに凶事、吉事が起こる。そして敦康親王の誕生により伊周・隆家はともに罪を許され、長徳四（九九八）年四月、帰京の運びとなった。

ここからが本文の場面となる。

【第一段落】同年五月に但馬から帰京した隆家に続き、伊周も帰京を急ぐが、折しも、筑紫では赤瘡（あかがさ）（＝はしか）が大流行していた。当時は、死を覚悟するような病である。伊周は、大弐の忠告もあり、じれったく思う気持ちを抑えながら、病が静まるのを待ち、陸路で上京する。都では伊周の近親者たちが伊周の帰京を待ち望んでいた。

【第二段落】十二月、伊周は都に戻った。妻の父である大納言の邸宅に入り、妻や成長した息子の松君との対面を果たし、無事に帰京できたことを感慨深く思う。

【第三段落】その後すぐに、中宮定子の御所に参上し、中宮定子とその子の宮たちに対面し、まず自分の恩人ともいうべき若宮を抱こうとするが、喪中の身であることから遠慮する。中宮定子と伊周は、生きて再会できた喜びと母の死への悲しみからひどく涙を流すのであった。

【第四段落】伊周は、吉日を選び、弟の隆家とともに桜本にある母の墓所を訪ね、兄弟は、母が生きていてくれたならどんなによかったかと涙を流し、その死を悼む和歌を詠む。そして、母の菩提を弔うための御堂を建てさせようと心に決めるのだった。

【全文解釈】

あの筑紫では、赤瘡の流行がそちら（＝筑紫）でもたいそうひどいので、帥殿は、（上京の準備を）急いでなさるけれども、大弐が、「この時期をやり過ごして上京なさいませ。道中がたいそう恐ろしゅうございます。（都まで）お見送りに参上する召使いなども、たいそう都合が悪いでしょう」などと申し上げたので、（帥殿は）いかにもとお思いになって、じれったくお思いになるけれど、とどまりなさって、世の人が少し病から遠ざかって（＝病の流行が静まって）上京なさる。この間に、（祖父の）二位が、この瘡で亡くなってしまった。たいそうしみじみと悲しいことばかりである。こうして上京なさるのも、ひたすら若宮（ご誕生の）のおかげだと、しみじみとうれしくお思いになりながら上京なさる。陸路をとっているので、もう到着なさったのだろうとばかり、（都にいる近親者たちは）早く（会いたい）と待ち申し上げなさる。

十二月に都に到着なさり、あの致仕の大納言邸にお着きになった。（帥殿の）奥方をはじめとし申し上げて、邸（やしき）の中の人々は、喜びの涙が不吉なほどはなはだしい。邸の様子など、昔とは違いすっかり寂しく荒れてしまっていた。奥方も、何も申し上げなさることができなくて、ただ涙にむせんで（帥殿に）会い申し上げなさる。松君が、たいそう大きく成長なさったのを（帥殿は）撫でて、たいそうお泣きになるので、松君も、どのようにお思いになるのであろうか、目をこすりなさり、とてもうれしいとお思いになっているのも、しみじみと感慨深くもっともなことである。帥殿、

（邸の庭は）浅茅の生える野原となり荒れてしまったけれども、ふるさ

との（＝住みなれた家の）松は高くなったことだなあ。（わが子、松君も成長したことだ。）

また、帥殿、

これまで住んでいた筑紫にあった、「生の松原」の名の通りに、そこに行ったけれど生きて戻って来て古い都を見ると（さまざまな思いが去来して）せつないことだ。

とおっしゃると、奥方、

その昔、あなたは「生の松原」に行き、その名の通りに生きて戻って来たが、その当時はわが身ながらわが身ではないような（悲しい）気持ちがしていたことだ。

とおっしゃる。「何はともあれ中宮の御所へ参上しよう」と言って、急いでお出かけになるにつけても、奥方は、涙がこぼれなさる。

中宮定子は、単衣の御衣の袖もしぼるほどに（涙に濡れて）いらっしゃる。「何事も落ち着いて（からお話ししましょう）」と（帥殿は）申し上げなさる。宮様たちが、それぞれにたいそうかわいらしくていらっしゃるが、（帥殿は）一の宮（＝若宮）をまず抱き申し上げたいようにお思いになるけれど、「（身内の喪に服している間は）不吉なようにばかり、何かと思われまして（一の宮を抱くのは遠慮されます）」と申し上げなさる様も、やはりとても世の中は無常なもの、無事に誰もが命を長らえなさることだけが、本当にすばらしいことであったとばかり、お見えになる。亡き母上の御事を繰り返し申し上げなさっては、誰もがたいそうお泣きになる。何事につけても流れる涙は同じだというようにお見えになるのも、感慨深くお見えになる。

そのころ吉日を選んで、亡き母上のお墓を拝むために、帥殿と、中納言は、一緒に桜本にお参りなさる。しみじみと悲しくお思いになって、（母上が）生きていらっしゃったならば（どんなにかよかっただろうに）とお思いになるにつけても、涙にむせびなさる。ちょうどその時、雪が激しく降る。

中納言、

ほんの少し色香を残して散ってしまった（母上のような）この桜本の桜の木の根元を見るのが悲しいことだ。

帥殿、

桜本の墓に降る淡雪を桜の花のように見て、その枝を折るにも涙で濡れる袖がいっそう雪で濡れることよ。

何事もしみじみと（墓の中の母上に向かって）申し上げておいて、（帥殿と中納言は）泣く泣くお帰りになる。なんとかして近いうちにそこに（母上を弔う）御堂を建てさせようと、お心に決めなさった。

【設問解説】

問1　短語句の解釈の問題

センター試験の古文の**問1**では、短語句の解釈が三つ出題される形式が定着している。短語句の解釈についての設問は、多くの大学入試問題にみられるが、センター試験では特に古語の意味や文法・語法に基づいた正確な解釈が求められる。まずは古語の基本的な意味や文法的知識をしっかりと押さえ、その上で文脈判断をすることが肝要である。

(ア)　「若宮の御験」

「若宮／の／御験」と品詞分解される。

験（名詞）
1　霊験。ご利益。
2　ききめ。効果。かい。
3　前兆。（この場合は「徴」とも表記される）

語の意味がわかっていれば、①の「お言葉」、③の「お許し」、④の「ご栄達」、⑤の「ご幸運」は間違いだと判断できるが、文脈を確認すると、帥殿が「かくて上らせ給ふも、ただ若宮の御験」だとある。前書きに、帥殿が罪を許されたのは若宮誕生という慶事によるとあることから、帰京は「若宮誕生」がもたらした「効果」であると解釈でき、「験」は前記2の意で、訳語としては②の「おかげ」がふさわしいとわかる。

(イ) **「え聞こえさせ給はず」**

「え／聞こえさせ／給は／ず」と品詞分解される。

え（副詞）
（打消の表現と呼応して）～できない。

聞こえさす（サ行下二段活用動詞）
1　申し上げる。（謙譲の本動詞）
2　（手紙を）差し上げる。（謙譲の本動詞）
3　～申し上げる。お～する。（謙譲の補助動詞）

給ふ（ハ行四段／下二段活用動詞）
1　お与えになる。（尊敬の本動詞）
2　～なさる。お～になる。（尊敬の補助動詞）
3　～ます。～させていただく。（謙譲の補助動詞）
＊1・2は四段で、3は下二段で活用する。

「聞こえさせ」は、副詞に接続しているので前記1か2の謙譲の本動詞だが、帥殿は帰京し、妻の父の邸宅を訪れているのだから、帥殿に手紙を「差し上げる」必要はなく、1の「申し上げる」の意と考えられる。「給は」は、四段活用の未然形で、動詞に接続していることから、尊敬の補助動詞と判断でき、「え～ず」の不可能の要素も加えて全体を直訳すると、「申し上げなさることができなくて」となり、正解は⑤だとわかる。帥殿の妻が、「何も申し上げなさることができなくて、ただ涙にむせんで（帥殿に）会い申し上げなさる」と解釈するのは、文脈にも合う。ちなみに、「聞こえさせ」を「聞こえ／させ」と品詞分解し、「させ」を使役・尊敬の助動詞「さす」の連用形だと考えることも可能であるが、今回の選択肢には「させ」を使役の意で訳出しているものはないため、ここでは尊敬の意と解すればよい。また、ヤ行下二段活用動詞「聞こゆ」に「申し上げる」の意があることから、「聞こえ／させ／給ふ」と品詞分解して二重尊敬で訳したとしても、「申し上げなさる」となり、やはり正解は⑤でよい。

(ウ) **「いかで今はそこに御堂建てさせん」**

「いかで／今／は／そこ／に／御堂／建て／させ／ん」と品詞分解される。

いかで（副詞）
1　どうやって。どのようにして。どういうわけで。（疑問）
2　どうして～か、いや～ない。（反語）
3　どうにかして。なんとかして。（願望）
＊1・2は推量表現と呼応することが多く、3は意志や願望表現と呼応する。

今（名詞／副詞）
1　現在。
2　新しいもの。
3　すぐに。ただいま。
4　近いうちに。まもなく。
5　さらに。もう。
6　新しく。今度。
＊1・2は名詞で、3～6は副詞である。

多義語である「いかで」「今」を考える前に、「させ」「ん」の二つの助動詞の意味を確定させよう。「させ」は(イ)でも述べた、使役・尊敬の意を持つ助動詞「さす」の未然形であるが、今回のように直下に「給ふ」「おはします」などの尊敬語を伴わない場合は、使役の意となる。「ん（む）」は「推量、意志、適当・勧誘、仮定・婉曲」の意をもつが、今回は直下に「とぞ、思し掟てける（＝と、お心に決めなさった）」という表現があることから、意志だと考えられる。「ん」が意志だとわかれば、それと呼応し

て「いかで」は前記3の「どうにかして・なんとかして」の意になり、また、将来に向けての計画を述べていることから、「今」は前記4の「近いうちに」ととらえるのがふさわしく、すると、正解は③の「なんとかして近いうちにそこに御堂を建てさせよう」であるとわかる。この傍線部のみを考えるなら、①の「どうやってこの先そこに御堂を建てさせるのだろうか」と訳すこともできるが、直下の「思し掟てける」と内容的につながらないので不適切である。

問2　文法問題

センター試験の古文の**問2**では、ほぼ毎年、文法問題が出題される。語の識別が中心であるが、敬語に関する問いが出題されることもある。基本的なものばかりなので、確実に解答できるよう練習しておこう。今回は「に」の識別を出題した。

「に」は多様な識別を要する語であるが、今回は、選択肢で扱った「完了の助動詞・断定の助動詞・格助詞・形容動詞の一部」について確認しよう。

「に」の識別

1　完了の助動詞「ぬ」の連用形
　→連用形に接続し、直下に助動詞「き」「けり」「たり」「けむ」が続く。

2　断定の助動詞「なり」の連用形
　→連体形・非活用語に接続し、下に補助動詞の「あり」「おはす」「侍り」「候ふ」などを伴うことが多い。「～にあり」で「～である」と訳出する。

3　格助詞
　→体言・連体形に接続し、「～に」と訳出する。

4　ナリ活用形容動詞の連用形活用語尾
　→上の語が、物事の状態や性質を表している。

a「失せにけり」

直上の「失せ」は、サ行下二段活用動詞「失す」の未然形か連用形と考えられるが、未然形に接続する「に」は存在せず、また直下に過去の助動詞「けり」があることから、この「に」は前記1の完了の助動詞だとわかる。

b「いかに思すにか」

直上の「思す」は、サ行四段活用動詞「思す」の終止形か連体形と考えられるが、終止形に接続する「に」は存在しないので、前記2の断定の助動詞「なり」の連用形、3の格助詞のいずれかと判断される。「に」の直下に係助詞「か」があるが、この「いかに思すにか」は、前後に読点があり、作者の感想などをはさみこむ挿入句となっていて、「か」の結びにあたる語を含む部分は省略されている。このような「結びの省略」の場合、一般的には、ラ行変格活用動詞「あり」に推量の助動詞が接続した「あらむ」が省略されていると考えられるが、ここもそれに該当し、このような場合における「に」は、格助詞ではなく、断定の助動詞である。省略された部分を含め、前後の文脈と合わせて訳してみると、「松君も、どのようにお思いになるのであろうか、目をこすりなさり～」となり、内容的にも適切なので、この「に」は断定の助動詞だとわかる。

c「桜本に詣らせ給ふ」

体言である「桜本」に接続しているので、前記2の断定の助動詞「なり」の連用形、3の格助詞のいずれかと判断されるが、下に補助動詞の「あり」などがなく、また、「桜本にお参りなさる」と訳出できるので、この「に」は格助詞である。

以上の検討から、正解は①である。

問3　経緯の説明問題

傍線部「かくて上らせ給ふ」に至るまでの経緯を説明する問題である。まず、傍線部を正しく確認する。その際のポイントは、誰が「上らせ給

ふ」のかということである。「せ」は助動詞「す」の連用形であるが、**問1**の(イ)・(ウ)で述べた「させ」と同様、使役と尊敬の意を持つ。この場合は直下に尊敬の補助動詞「給ふ」を伴っているため、どちらの意の可能性もあり、「せ」が使役ならば「大弐が帥殿を上京させなさる」、尊敬ならば「帥殿が上京なさる」と考えられるが、ここでは使役の対象が書かれておらず、また、本文2行目にある大弐の動作「申しければ」には尊敬語が用いられていないのに対し、帥殿の動作には常に尊敬語が用いられている。すると「上らせ給ふ」の主体は、「大弐」ではなく、「帥殿」だと判断され、傍線部は「帥殿がこうして上京なさる」の意であるとわかる。

次に、それに至るまでの経緯を考えていこう。冒頭から傍線部の直前までの箇所に注目すると、「帥殿、急ぎ立たせ給へども、大弐の、『このごろ過ごして上らせ給へ。道のほどいと恐ろしう侍り。御送りに参らむ下人なども、いと不便に侍らむ』など申しければ、げにと思しめして、心もとなく思しながら、立ちどまらせ給ひて、世の人すこし病みさかりて上らせ給ふ」という一文がある。この末尾に「上らせ給ふ」と、傍線部と同様の表現があることから、この文に具体的な状況の経過が述べられていると考えられる。ポイントとなるのは、「不便に」「げに」「心もとなく」である。

不便なり（ナリ活用形容動詞）
1　不都合だ。困る。
2　かわいそうだ。気の毒だ。
3　かわいい。

げに（副詞）
1　なるほど。いかにも。本当に。（他人の言葉に賛成、共感する）
2　まったく。実に。（程度を強調する）

心もとなし（ク活用形容詞）
1　気がかりだ。不安だ。
2　待ち遠しい。じれったい。
3　はっきりしない。ぼんやりしている。

帥殿は、「急ぎ立たせ給へども」、すなわち、上京を急ぐけれども、大弐から「このごろ過ごして上らせ給へ。道のほどいと恐ろしう侍り。御送りに参らむ下人なども、いと不便に侍らむ」と言われる。「下人」とは、ここでは都まで帥殿を送っていく召使いのことであるが、病が流行しているなかで上京するのは、道中で病にかかるかもしれず、その召使いたちにとっても「いと不便に侍らむ」というのだから、ここの「不便に」は前記1の「不都合だ・困る」の意であると考えられる。帥殿のみならず、送っていく者にとっても不都合な状況だということである。そして帥殿は、その言葉に対し「げに」と思う。「げに」は前記1の用法で、帥殿は、その忠告に対し、「いかにも」と納得したのである。そうはいうものの、上京を急いでいたのだから、帥殿は「心もとなく」感じる。その流れから考えると「心もとなし」は前記2の「待ち遠しい・じれったい」の意がふさわしい。帥殿は、大弐の忠告を受け入れ、じれったく思いつつとどまって、そして（注3）にあるように、病が沈静化してから上京したのである。この直前部分が正しく述べられているのは⑤だけで、正解は⑤となる。

①と②は、帥殿の上京の経緯を大弐の側から述べた形になっている。大弐は、上京を急ぐ帥殿を「道中が危険だし、召使いにも不都合だから、病の流行をやり過ごしてから上京なさい」と忠告してひきとめた、というところまでは言えるが、それ以上のことは本文からは判断できず、①は「帥殿がいらだつ様子を恐ろしく感じて、やむなく出立を許可した」、②は「しっかりした召使いにお供をさせれば大丈夫だと、自らの不安を押し殺して」が誤りとなる。③は「大弐の説得に耳を貸したくなかったが、流人の立場では逆らうこともできず」、④は「祖父が赤瘡で亡くなったという知らせを受けて、葬儀に駆けつけるために、急いで出立した」がそれぞれ誤りである。

問4　和歌の説明問題

和歌に関する問題は、センター試験の古文において頻出である。和歌の解釈や趣旨、そこに込められた心情などに加えて、修辞法などの表現方法が問われることもある。枕詞・序詞・掛詞・縁語といったものがどういうものかを一通り学んでおくことが必要である。

今回は、三首の和歌の修辞法と和歌の趣旨について問うている。和歌は、内容抜きに技巧だけがあるわけではない。和歌そのものを十分に分析・吟味し、それに加えて、その和歌を、誰が、どのような状況で詠んだのかを押さえていかなくてはならない。ここは、筑紫に配流されていた帥殿がようやく帰京し、致仕の大納言邸で、妻と成長した息子の松君に対面した場面であり、その時に詠まれた帥殿と妻の和歌である。

まず、**A**の和歌について考えてみよう。

和歌は、「五／七／五／七／七」と句ごとに分け、まず句切れ（最終句を除く各句の末に終止形・命令形・係り結びの結びの語・終助詞などがあり、そこで文意が切れているとみなせる箇所）があるかどうかを確認してから、解釈するとよい。**A**は「浅茅生と／荒れにけれども／ふる里の／松は木高く／なりにけるかな」と句に分けられ、句切れはない。「浅茅生」は「浅茅（＝たけの低い茅（ちがや））。茅とは雑草の一種）の生えるような荒れた所」の意の名詞、「荒れ」はラ行下二段活用動詞の連用形、「木高くなり」は、ク活用形容詞「木高し」の連用形とラ行四段活用動詞「なる」の連用形、二句と五句の「に」は、ともに連用形に接続しているので、完了の助動詞「ぬ」の連用形、それに接続している「けれ」・「ける」は過去・詠嘆の助動詞「けり」の已然形と連体形、「かな」は詠嘆の終助詞である。これを踏まえて直訳すると、

浅茅の生える野原となり荒れてしまったけれども、ふるさとの松は高くなったことだなあ。

となる。荒れてしまったのは、前述の状況から考えると「致仕の大納言邸の庭」となり、意味は一応通る。しかし、この和歌が帥殿の心情を訴えるものである以上、そのことを踏まえて解釈する必要がある。和歌は、帥殿がようやく帰京し、妻と息子の松君に対面した直後に詠まれている。選択肢②に「掛けられており」とあるのは、「掛詞」のことだが、**「掛詞」は、同音異義を利用し、一語または語の一部に二つの意味を持たせる技巧**であるから、和歌中の「松」に「松君」を掛けているのではないかということが推測できる。このことから、下の句を解釈してみると、

松が高く生長したように、わが子、松君も成長したことだ。

と、「松」に「松君」の意味を持たせて訳出でき、息子松君の成長への感慨を詠んだ和歌であることがわかる。感動の中心はこの「松君の成長」という点であり、①の「松もずいぶん高く伸びたものだと、自分が邸を留守にしていた時間の長さにあらためて驚く気持ちを詠んでいる」という内容では不十分で、誤りだといえる。また、①では「枕詞」についても言及されている。**「枕詞」とは、ある特定の語句を導き出すために用いられる五音節の修飾句**であり、文意に関わらないので訳出する必要はない。ここでは、「浅茅生と」が「荒れ」の枕詞とあるが、「浅茅生」は荒れた場所を表す語で、この和歌では「浅茅の生える野原となり…」と訳出する必要があるので、「枕詞」とは言えない（但し、「浅茅生の」であれば、「小野」を導く枕詞である）。①は修辞法の点でも誤りといえる。②は、前述の通り「松」が「松君」の意を掛けており、内容的にも適切である。

次に、**B**の和歌を考えてみよう。「来し方の／生の松原／いきて来て／古き都を／見るぞ悲しき」と句に分けられ、句切れはない。「来し方」は「過ぎてきた方向」と「過去」の意をもつ名詞、「いきて」は、直前に帥殿が行っていた筑紫の地名である「生の松原」があることから、「帥殿が、筑紫に行って、生きて帰京した」と解釈でき、「行きて」と「生きて」が掛詞であるとわかる。「悲しき」はシク活用形容詞「悲し」の連体形で、強意の係助詞「ぞ」の結びとなっている。以上のことを踏まえて解釈する

と、

これまで住んでいた筑紫にあった、「生の松原」の名の通りに、そこに行ったけれど生きて戻って来て古い都を見るとせつないことだ。

となるが、この「せつなさ」とは都そのものに対する思いではなく、生きながらえて戻って来て、古い都、つまり慣れ親しんだ都を目にした時の、自身と家族の身の上にこれまで起こったさまざまな出来事に対する感慨を詠んでいると考えられる。よって、③の「相変わらず保守的で代わり映えのしない都の様子を目にした時の失望感」は、「古き都」の状況説明と、帥殿の心情説明がともに誤りである。さらに、修辞法についても確認しよう。**「序詞」とは、ある語句を導くためにその上に置かれる修飾句**である。序詞の部分は自然描写であることが多く、和歌の主意とは直接関わらない。序詞は、一般的に次の三つに分類することができる。

序詞

多くは初句から始まり、七音節以上である。ここでは、傍線部（序詞）が波線部の内容を導いている。

1　「の」（比喩。～のように・～のような）で終わるもの。

あしひきの　山鳥の尾の　しだり尾の　長々し夜を　ひとりかも寝む

2　序詞の直下が掛詞となるもの。

風吹けば　沖つ白波　龍田山　夜半にや君が　ひとり越ゆらむ
立つ

3　同音・類音が反復するもの。

みかの原　わきて流るる　いづみ川　いつ見きとてか　恋しかるらむ

③の説明は、右のどの形にもあてはまらず、また、「いきて来て」が表現すべき心情であることから、「来し方の生の松原いきて来て」が「古き」の序詞とは言えないとわかる。③は修辞法についても誤りである。

最後に、**C**の和歌を見てみよう。「そのかみの／生の松原／いきて来て／身ながらあらぬ／心地せしかな」と句に分けられ、句切れはない。「そのかみ」は「その当時・その昔」の意の名詞、「いきて」は**B**の和歌と同じく「行きて」と「生きて」の掛詞となっている。「身」は「自分・わが身」の意の名詞、「ながら」は接続助詞で、ここでは逆接で訳出する。「あら」はラ行変格活用動詞「あり」の未然形、それに接続しているので「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形であり、ここでは「あらぬ」の形で「別の・他の」と訳出する慣用句となっている。「せ」はサ行変格活用動詞「す」の未然形、「し」は過去の助動詞「き」の連体形（過去の助動詞「き」はサ変・カ変には未然形にも接続するので注意しよう）、「かな」は詠嘆の終助詞である。これらを踏まえて解釈すると、

その昔、あなたは「生の松原」に行き、その名の通りに生きて戻って来たが、その当時はわが身ながらわが身でないような気持ちがしていたことだ。

となる。この和歌は、やっと夫の帥殿と対面できた妻が詠んだもので、「わが身ながらわが身でない気持ち」とは、妻の気持ちをさす。「その当時」とは、帥殿が筑紫に流された当時のことであるから、妻が感じた「わが身ながらわが身でない気持ち」とは、「夫と離れていることが現実とは思えず、悲しみのあまり何もわからなくなる気持ち」を表していると考えられる。以上のことから、④は、「いきて」に「行きて」と「生きて」が掛けられているというのは正しいが、詠まれている趣旨が「帥殿の姿が昔とはまるで別人のようだと、その配流先での苦労を思いやる気持ち」というのは誤りである。⑤は、「自分もともに筑紫に行きたいと涙した」が和歌の趣旨とは違い、また「これからはずっと一緒にいられると安堵する気持ち」も読みとれない。したがって、⑤も誤りである。また、⑤で修辞法として問われた**「縁語」は、ある語に関係のある語を和歌中で意識的に用**

いて、飾りとする技巧のことである。例えば、「弓……張る・引く・射る・かへる」というようなものである。これらの語が「弓」との連想でつながっているのがわかる。しかし、「松原」と「いきて」が「身」と連想でつながっているとはとうてい言えない。したがって、⑤は、修辞法の説明も誤っている。

以上の検討から、②が正解である。

問5　心情の説明問題

心情の説明問題は、傍線部が解釈できればそれで解答が得られる場合もあるが、そうでない場合は、その心情に至るまでの流れを丁寧に読み取っていくことが必要である。その時、注意すべきは、会話文・胸の内の思いを描く心中表現・和歌などである。また、形容詞・形容動詞の意味にも注意しよう。

ここでは、傍線部**Y**「泣く泣く帰らせ給ふ」を解釈しても解答は得られない。そこで、次に傍線部の前の部分を見てみると、心中表現と和歌が発見できる。

まず、心中表現としては、実際に考えたこととして「おはせましかば」があるが、その前後と合わせて見ていくと、「あはれに悲しう思されて、おはせましかばと思さるるにも」とあり、ここにも二人の気持ちが表されている。帥殿と中納言は、桜本の亡き母の墓に参り、しみじみと悲しく思い、「おはせましかば」と思いながら涙を流したのである。この「ましか」は、重要な助動詞である。

まし（助動詞）

1　反実仮想（もし～たなら……ただろうに）

＊事実と反対のことを仮に想像し、その結果を推量する。次のような構文をとることが多い。

～ましかば
～ませば
～せば
～未然形＋ば
……まし

2　ためらいの意志（～しようかしら。～したものだろうか）

＊疑問語の「いかに」「なに」「や」などと呼応する。

ここは、前記1の反実仮想の意で「……まし」を含む述部が省略された形となっている。「おはせ」は「あり・をり」の尊敬語で、「おはせましかば」で「もしいらっしゃったならば」と直訳できるが、そのように仮定されるのは、現実には「いらっしゃらない」ということであり、よってその主体は、帥殿と中納言がその墓前にいる亡き母であると考えられる。「あり」は「生きている」とも訳出するので、ここは「もし母が生きていらっしゃったならば」と解釈できる。帥殿と中納言が帰京して、「母がもし生きていたら」再会できたのであるから、省略部分には、「よかっただろうに」などの表現を補うとよい。しかし、現実としては、母はもうこの世にはいない。二人は「母の不在」をこの上なく悲しく思い、涙を流すのである。したがって、「もし生きていたならば」「亡くなってしまったので」と表現される人物が母でなく祖父だとなっている①と②は誤りであるとわかる。

次に傍線部の前の和歌を解釈していこう。

中納言の和歌は、「つゆばかり／にほひとどめて／散りにける／桜がもとを／見るぞ悲しき」と句に分けられ、句切れはない。「つゆばかり」は「ほんの少し」の意の連語、「にほひ」は「つやのある美しさ・かおり」の意の名詞、「散りにける」の「に」は、ラ行四段活用動詞「散る」の連用形「散り」に接続しているので完了の助動詞「ぬ」の連用形、「ける」は過去の助動詞「けり」の連体形、四句目の「桜がもと」には、「桜が本」（＝桜の木の根元）と地名の「桜本」が掛けられている。十二月頃という

季節がら、桜が咲いているはずはなく、ここでは激しく降る雪を桜に見立てている。また、「桜本」は、母の墓のある場所であることから、散ってしまったのは、桜にたとえた母の命だとも考えられる。そして、五句目で「見るぞ悲しき」と強意の係助詞「ぞ」と「悲しき」を係り結びとし、深い悲しみを強調しているのである。このことを踏まえて解釈すると、

ほんの少し色香を残して散ってしまった（母上のような）この桜本の桜の木の根元を見るのが悲しいことだ。

となる。

帥殿の和歌は、「桜もと／降るあは雪を／花と見て／折るにも袖ぞ／ぬれまさりける」と句に分けられ、こちらも句切れはない。中納言の和歌と同じく「桜もと」を掛詞とし、また雪を桜の花に見立てている。「ぬれまさり」は「いっそう濡れ」の意だが、「袖が濡れる」というのは、「袖を濡らす」という表現が「泣く」の意であるのと同様に、涙を流し袖が濡れているということで、「折るにも袖ぞぬれまさりける」で「枝を折るにも涙で濡れる袖がいっそう雪で濡れることよ」などと解釈できる。涙の理由は、中納言と同様に、母の死への悲嘆である。詠嘆の助動詞「ける」が強意の係助詞「ぞ」の結びとなっていて、ここでも深い悲しみを強調している。以上のことから解釈すると、

桜本の墓に降る淡雪を桜の花のように見て、その枝を折るにも涙で濡れる袖がいっそう雪で濡れることよ。

となる。二人の和歌には、ともに「母の死を悲しむ」という気持ちが込められているのである。以上の、「おはせましかば」に込められた心情と和歌の内容をとらえている選択肢は③であり、これが正解である。④は、前半の内容に誤りはないが、「母の死があらためて世の無常を自分たちに気づかせてくれたことだ」という部分が不適当である。⑤は、「桜の花と見間違えるように散る雪を皆でながめることもできただろうに」が「おはせましかば」の後の省略部分の内容としては不適当であるし、「配流されていたことを恨めしく思っている」が和歌の内容とは違うものとなっている。

問6　内容に関する説明問題

センター試験の古文では、内容の理解を確かめる設問が最後に出題される。近年は、選択肢に鉤括弧で文章中の表現が引用されていることもあるので、その前後をしっかりと検証するとよい。また、このような出題にそなえて、本文を読む際に神経を集中させ、どの辺りに何が書いてあるか、おおまかにでも記憶にとどめ、すばやく該当する箇所に戻れるようにしたい。

選択肢の内容を確認していこう。

①は、全体が誤りである。第一段落最終部の「今はおはし着かせ給ひぬらむ」の直後に「いつしかと待ち聞こえさせ給ふ」とあるが、ここには尊敬の補助動詞「給ふ」が用いられている。**問3**でも述べたが、大弐の動作には尊敬語は用いられていない。よって、「いつしか（＝はやく）」と帥殿の帰京を待ちわびているのは、都で待つ帥殿の近親者たちだと考えられる。

②は、「自らがかつての権勢を失ったことを思い知り、落胆した」が誤りである。「荒れはてた邸」には、少なからず「没落」という印象があるものの、帥殿が邸を見てすぐにそのように感じたかどうかということは、本文からは判断できない。

③は、まず、「帥殿の妻の父である大納言は」が誤りだといえる。第二段落の最初に大納言邸の記述はあるが、大納言がその場にいるかどうかは本文から判断できない。かりに「殿の内の人々」に、大納言が含まれていると考えたとしても、そこで流される涙は、帰京した帥殿を待ち迎えた喜びの涙であり、松君の様子を見て流されたものではなく、「それも『あはれにことわりなり』と自らもあふれる涙をぬぐった」という部分も誤りと

なる。ちなみに、この「あはれにことわりなり（＝しみじみと感慨深くもっともなことである）」というのは『栄花物語』の作者の感想である。物語においては、このように、登場人物の心情や行動に対する作者の視点が書き加えられることもあるので、これを機に覚えておくとよい。

④が正解である。第三段落に「宮の御前、単の御衣の袖もしぼるばかりにておはします」、「宮たち、さまざまにいみじううつくしうおはします」とある。

⑤は、「互いの幸運を喜んで泣き、その様子は『よろづ一つ涙』というように見えた」が誤りである。「一つ涙」は、（注14）にある『後撰和歌集』の「うれしく感じるのもつらく感じるのも一つの心であって、それを区別できなくしているのはどちらの場合にも流れる涙であったよ」という意の和歌を踏まえた表現である。第三段落では、再会に際し涙を流す宮の御前の様子とともに、「故上の御ことをかへすがへす聞こえさせ給ひつつ、誰もいみじう泣かせ給ふ（＝亡き母上の御事を繰り返し申し上げなさっては、誰もがたいそうお泣きになる）」様子が描かれ、帥殿が生きて戻った喜びの涙と母の逝去への悲しみの涙を「よろづ一つ涙」と表現していると考えられるので、「互いの幸運を喜んで泣き」流れる涙だけではない。また、「『誰も御命をたもたせ給ふ』がゆえに」の部分も、本文では「誰も御命をたもたせ給ふのみこそ、世にめでたきことなりけれとのみぞ、見えさせ給ふ（＝無事に誰もが命を長らえなさることだけが、本当にすばらしいことであったとばかり、お見えになる）」とあり、帥殿と宮の御前が「命を長らえていたからこそだ」と思って互いの幸運を喜んで泣いたという流れではなく、傍目からは「生きながらえるのはすばらしいと見えた」ということであり、その部分も誤りといえる。ここにも、③の部分で解説したように、作者の視点が述べられているのである。

第4問　漢文

【出典】

『魏書』全百十四巻。北斉の魏収の撰。南北朝時代の北魏の歴史を記した正史で、帝紀十二巻、列伝九十二巻、志十巻から成っている。三国時代の魏と区別するために『後魏書』とも言う。北斉にへつらって北魏をおとしめるなど、記事や論説に公平さを欠く部分があり、「穢史」（事実を歪曲した歴史書）と評されている。魏収は若い頃から文才を知られ、北魏・北斉の両朝廷に仕えて高官となったが、自分の才能を鼻にかけるなど、度量の小さい人物で、軽薄な行いも多かった。本文は、巻二十八・古弼伝の一節である。

【本文解説】

北魏（三八六―五三四）は、北方民族である鮮卑の拓跋部が華北（北部中国）に建てた国である。統一王朝である西晋（二六五―三一七）の末期、その内乱に乗じて北方民族の匈奴が北漢国を建国して以来、華北の各地では百三十五年間にわたって匈奴・鮮卑・羯・氐・羌の五つの民族や漢民族の国の興亡が繰り返された。これを五胡十六国という。このような状況にあった華北を四三九年に統一することに成功したのが北魏である。本文は、北魏の太宗明元帝・世祖太武帝の二人の皇帝に重用され、政治と軍事の両面で活躍した名臣、古弼に関する話である。

世祖は狩猟を楽しむために、騎兵たちによく肥えた馬を支給するよう尚書省（中央行政官庁）の長官である古弼に命じたが、古弼はなんと貧弱な馬ばかりを支給した。世祖は古弼を殺してやると言い放つほど激怒した。古弼はなぜ世祖の命令に背いたのか。古弼はその真意を部下に対して語った。わが国北魏の対外関係は今緊張状態にある。北方には異民族がおり、南方には漢民族の王朝が今も存続しており、ともに北魏を侵略する機会を窺っているのだ。だからよく肥えた馬を軍に装備して、常に不測の事態に備えておかなければならない。万が一南北の脅威に対する備えを怠って異民族や敵国の侵略を招いたとしたら、それは世祖が狩猟を思う存分楽しむことができないよう

に仕向けることよりもはるかに大きな罪なのだ、と。このように皇帝の個人的な楽しみよりも国家の安全を優先すべきであるとの考えから、古弼は世祖の命令に背いたのである。しかも古弼は、国家の利益のためであれば、わが身が犠牲になってもかまわないと、死を覚悟のうえで世祖に逆らったのである。これを知った世祖は、古弼が常に遠い将来まで見通して適切な判断を下すことのできる思慮深い人物であり、また国家のためであれば死ぬことも厭わない忠義な臣下であることを改めて認識し、「国家にとっての宝である」と称賛したのである。

忠義な臣下とは君主の命令に盲目的に従う臣下のことを言うのではない。古弼のように、国家や君主のためであれば、死も覚悟のうえで君主を諫めたり反抗したりする臣下のことなのである。

【書き下し文】

世祖大いに閲し、将に河西に校猟せんとす。弼留守す。詔して肥馬を以て騎人に給せしむるに、弼命じて弱き者を給せしむ。世祖大いに怒りて曰はく、「尖頭奴、敢へて朕を裁量するなり。朕台に還らば、先づ此の奴を斬らん」と。弼の頭尖れば、世祖常て之に名づけて筆頭と曰ふ。是を以て時人呼びて筆公と為す。弼の属官惶怖して誅せられんことを懼る。弼之に告げて曰はく、「吾以為へらく、君に事へて畋猟して盤遊に適はざらしむるは、其の罪小なり。不虞に備へずして、戎寇をして恣逸せしむるは、其の罪大なりと。今北狄孔だ熾にして、南虜未だ滅びず、狡焉の志、辺境を窺伺ふは、是れ吾が憂ひなり。故に肥馬を選びて軍実に備へ、不虞の遠慮を為すなり。苟くも国家をして利有らしめば、吾何ぞ死を避けんや。明主は理を以て干すべし。此れ吾が罪に自る。卿等の咎に非ず」と。世祖聞きて歎じて曰はく、「臣の此くのごとき有るは、国の宝なり」と。衣一襲・馬二匹・鹿十頭を賜ふ。

【全文解釈】

世祖は盛大に軍隊の検閲を行い、河西地方で、柵に獣を追い込んで捕える狩猟をしようとした。古弼は都の留守を預かることになった。（世祖は）よく肥えた馬を騎兵に支給せよという命令を下したが、古弼は（部下に）貧弱な馬を支給するように命令した。世祖はひどく腹を立てて言った、「頭の尖ったやつは、私の命令をむやみに自分の考えで処理したのだ。私が朝廷に帰ったら、真っ先にあいつを殺してやる」と。古弼の頭は尖っていたので、世祖は古弼のことを筆頭という名前で呼んでいた。こういうわけで当時の人々は（彼のことを）筆公と呼んでいた。古弼の部下たちは恐れ、（自分たちも）処刑されるのではないかと心配した。古弼は部下たちに告げた、「『主君にお仕えして、（主君を）節度なく狩猟にふけることがないようにさせた場合は、罪は小さいのである。不測の事態に備えようとせず、異民族を勝手気ままに振る舞わせた場合は、罪は重大である』と私は考える。現在北方の異民族は勢いが盛んであり、南方の敵もまだ滅びておらず、狡猾な心を持って辺境の様子を窺っているということこそ、私の心配の種なのだ。だから、よく肥えた馬を選んで軍の装備として用意しておき、将来不測の事態が起こりかねないことを見通して備えているのだ。もし国家が利益を得られるのなら、私は死を避けようとは思わない。賢明な君主に対しては、道理に基づいて反抗するのがよいのだ。これは私の罪であって、そなたたちの罪ではない」と。世祖はこの話を聞いて感嘆して言った、「これほど優れた臣下がいるのは、国家にとっての宝というものである」と。（世祖は古弼に）衣類一そろい・馬二匹・鹿十頭を賜与した。

【重要語・基本句形】

I　**重要語**

○ 以二――一ヲ　＝――を・――によって・――のために・――として

○ 敢テ　＝思い切って・むやみに

○ 是ニ以テ　＝こういうわけで

○ 以為――ト　＝――と思う

○事（つかフ）＝仕える
○故（ゆえニ）＝だから
○遠慮（えんりよ）＝遠い将来まで見通した深い考え
○可（ベシ）ニ――一＝――できる・――するのがよい・――してもよい
○理（リ）＝道理
○如（ごとシ）レ此（かクノ）＝このようである

Ⅱ　**基本句形**

○将（まさニ）ニ――（ント）す一＝いまにも――しようとする・――するつもりだ（再読文字）
○命（めいジテ）レ□（ニ）――（シム）＝□に命令して――させる（使役形）
○使（しム）ニ□（ヲシテ）――一＝□に――させる（使役形）
○未（いまダ）ニ――（ズ）一＝まだ――しない（再読文字）
○苟（いやしクモ）――（バ）＝もし――ならば（仮定形）
○使（しメバ）ニ□（ヲシテ）――（ン）一＝もし□が――ならば（仮定形）
○何（なんソ）――（ンや）乎＝どうして――しようか、いや――しない（反語形）

【設問解説】

問1　語句の意味の問題

(1)・(2)ともに漢文にはしばしば出てくる語句である。

(1)「遠慮」は、日本語では「関係者に不都合な事柄が起こることを考えて、行いを控えめにする」「人からの申し出を辞退する」などの意味で用いられるが、漢文では、「深謀遠慮」（深く考えて計画を立て、遠い将来まで十分に考えをめぐらすこと）という四字熟語から明らかなように、「遠い将来まで見通した深い考え」の意味で用いられる。正解は④。③の選択肢に惑わされないこと。

(2)「理」は、動詞としては「をさむ」と読んで(一)「玉を磨く」、(二)「治める」、(三)「処理する」、(四)「法によって裁く」などの意味を表す。また名詞としては(五)「玉の表面の模様」、(六)「木目」、(七)「物事のすじみち・道理」、(八)「裁判官」などの意味を表す。傍線部を含む一文を直訳すると「賢明な君主に対しては、『理』によって（に基づいて）反抗するのがよいのだ」となるので、ここの「理」は名詞で(七)の意味であると判断できる。正解は③。「理」は、名詞としては多く「道理」の意味で用いられることを覚えておこう。

問2　返り点と読み方の問題

ポイントは二点。まず「将」は再読文字であり、「いまにも――しようとする・――するつもりだ」の意味で、「まさに――せんとす」と読む。①「校猟せん」、②・④「校猟すべし」はともに誤り。

次に「於」に着目する。前置詞的な働きをする「於」が述語の後に用いられた「述語 於――」の形は、「於」が置き字となり、「――」に「に・より・よりも・を」の送り仮名を送って述語に返って読む。「校 猟 於 河 西」は、「河西」が地名であるから、「於」は場所を示す用法で、「校（コ）猟 於 河 西（ニ）」と返り点を施して「河西に校猟す」と読む。③・④「河西に於て」は誤り。「――に於て」と読むのは、「於」が述語より前に置かれた「於（テ）――（ニ）述語」の形の場合である。全体では「河西地方で、柵に獣を追い込んで捕える狩猟をしようとした」の意味で、「将（ニ）校（コ）猟 於 河 西（ニ）」と返り点を施して「将に河西に校猟せんとす」と読む。正解は⑤である。

問3　理由説明の問題

傍線部の前後の内容に根拠を求めて解答することが大切である。

傍線部B「世 祖 大 怒（イカリテ）」は「世祖はひどく腹を立てて」の意味であるから、本問では、世祖がなぜ腹を立てたのかが問われている。傍線部の前後の内容に着目する。まず直前の「詔（シテ）以（テ）肥 馬（ヲ）給（セシムルニ）騎 人（ニ）、弼 命（ジテ）給（セシム）弱（キ）者（ヲ）」を直訳すると、「（世祖は）命令を下してよく肥えた馬を騎兵に支

給させようとしたが、古弼は命令を下して貧弱な『もの』を支給させた」となる。ここで注意すべきは「弱者」の意味である。「者」は「こと・もの・人」などの意味を持つが、「弱者」は、騎兵によく肥えた馬を支給せよと世祖から命じられた時に、古弼が支給するように部下に命じたものであるから、「貧弱な『もの』」＝「貧弱な馬」の意味であると判断できる。次に傍線部の直後の世祖の発言「尖頭奴、敢裁量朕也」を訳すと、「頭の尖ったやつは、私の命令をむやみに自分の考えで処理したのだ」となる。以上の内容から、世祖は、狩猟を行うに際してよく肥えた馬を騎兵に支給せよと古弼に命じたにもかかわらず、古弼が自分の判断で命令に背いて貧弱な馬しか支給しなかったことに対して腹を立てたことがわかる。

①「貧弱な兵士と馬しか用意しなかった」、②「貧弱な兵士ばかりをよこした」、④「貧弱な兵士と馬ばかり準備した」は、ともに「給二弱者一」の意味を取り違えていて、誤りである。古弼が自分の判断で世祖の命令に背いたことに対して世祖は腹を立てたのであるから、⑤「古弼が無能で、……自分の要求に応えられず」も誤りである。正解は③。

問4　内容説明の問題

ここは、よく肥えた馬を騎兵たちに支給せよという世祖の命令に背いた理由について古弼が部下たちに語った言葉である。傍線部C「不虞」とは「思いがけないこと・不慮の事態」の意味であるが、この意味がわからなくても、文脈からその具体的な内容を決定することができる。傍線部を含む一文を直訳すると、「『不虞』に備えようとせず、異民族を勝手気ままに振る舞わせた場合は、罪は重大である」となる。このことから、本来「不虞」に備えておかなければならないのに、備えを怠ってしまった場合には、「異民族が勝手気ままに振る舞う」という事態を招いてしまうということがわかる。したがって「不虞」とはまさに「異民族が勝手気ままに振る舞う」という事態を指しているとみなすことができる。それでは「異民族が勝手気ままに振る舞う」とは具体的にはどういうことなのか。直後の記述に着目すると、「今北狄孔熾、南虜未レ滅、狡焉之志、窺二伺辺境一、是吾憂也。故選二肥馬一備二軍実一」（現在北方の異民族は勢いが盛んであり、南方の敵もまだ滅びておらず、狡猾な心を持って辺境の様子を窺っているということこそ、私の心配の種なのだ。だから、よく肥えた馬を選んで軍の装備として用意しておき）とある。この内容を踏まえて考えると、「異民族が勝手気ままに振る舞う」とは、具体的には「北方の異民族や南方の敵国が北魏に戦争を仕掛けてくる」という事態、つまり「北魏」を主体にして言いかえると「北魏が北方の異民族や南方の敵国に侵略される」という事態のことであると判断できる。正解は②である。

問5　現代語訳の問題

まず傍線部の前半の意味を考える。「苟――」は「もし――ならば」という順接の仮定条件を表す。「使二□――一」は使役形で「□に――させる」の意味であるが、「使二□――一」は「もし□が――ならば」という順接の仮定条件を表す。以上の点を踏まえて前半を直訳すると、「もし国家が（に）利益があるのならば」となる。②「たとえ……としても」、④「としても」はともに逆接の仮定条件で、誤りである。また⑤「……から」は順接の原因条件で、誤りである。

次に後半の意味を考える。「何――乎」は、文末を「ん乎」と読んでいるので反語形で、「どうして――しようか、いや――しない」の意味である。これを踏まえて直訳すると、「私はどうして死を避けたりしようか、いや死を避けたりはしない」となる。①「是非とも死を避けなければなりません」、④「死を避けられないかもしれません」、⑤「きっと死を避けられることでしょう」はいずれも明らかな誤りである。正解は③である。

問6　書き下し文の問題

重要語の読みに注意を払うとともに、文意にふさわしい読み方を考えることが大切である。

傍線部**E**は、世祖の命令に背いた古弼の真意を知って、世祖が述べた言葉。まず前半のポイントは「如レ此」の読み方である。これは重要語であり、「このようである」の意味で「かくのごとし」と読む。②・⑤「これにしく」、③「これのごとき」はいずれも誤りである。

次に後半のポイントは「也」の読み方である。「也」が傍線部のように文末に置かれた場合には、断定の助動詞として「なり」と読む用法と、疑問または反語の助詞として「か」または「や」と読む用法とがある。直後に「賜二衣一襲・馬二匹・鹿十頭一」（衣類一そろい・馬二匹・鹿十頭を賜与した）とあるように、世祖は古弼に褒美を与えたのであるから、「国之宝也」は「国家にとっての宝である」と古弼を高く評価した言葉であると判断できる。したがって「也」は「なり」と読むのがふさわしい。②・④「宝ならんや」（未然形＋んや）は反語の意味の場合の読み方、③「宝なるか」（連体形＋か）は疑問の意味の場合の読み方で、ともに誤りである。正解は①である。

前半の「有二臣如レ此」は、直訳すると「臣下でこのような者がいるのは」の意味なので、この意味に即して「臣」に同格の「の」を送り、「臣のかくのごとき有るは」と読む。④「臣にかくのごとき有るは」はやや紛らわしいが、このように読むのは「臣有レ如レ此」のように「臣」が「有」の前に置かれた場合である。以上の点についても覚えておこう。

問7　理由説明の問題

本問では、「世祖はなぜ『歎』じたのか」と問うているが、まず「歎」の意味を考えよう。「歎」は「嘆」と同じで、㈠「悲しみ嘆く」の意味と、㈡「ひどく感心する」の意味を持つが、ここでは古弼のことを「国之宝也」と称賛しているので、㈡の意味である。それでは世祖はなぜ古弼に感心したのか。よく肥えた馬を騎兵たちに与えよという自分の命令に古弼が背いたことに対して、世祖は腹を立てたのだが、部下に対して古弼が語った言葉を聞いてその真意を知った結果、ひどく感心したのであった。したがって古弼の言葉の内容に着目すれば、世祖が感心した理由が明らかになる。古弼は、「北方の異民族や南方の敵が北魏を侵略する機会を窺っていることこそ、私の心配の種なのであり、よく肥えた馬を軍に装備して不測の事態に備えるのだ」と述べている。つまり、今国家が異民族や敵国と緊張関係にある以上、狩猟という皇帝の楽しみよりも辺境における不測の事態に備えることの方を優先すべきだとの考えから、世祖の命令に背いたことを明らかにしたのだ。さらに古弼は、「国家が利益を得られるのなら、自分は死も避けたりはしない」と、死も覚悟のうえで世祖に逆らったことを表明している。これを聞いて古弼の真意を知った世祖は、古弼が将来のことまで見通して適切な判断を下すことができる思慮深い人物であり、また自分の命よりも国家の利益を優先する忠義な臣下であることを改めて認識し、ひどく感心したのである。正解は以上の内容と一致する⑤である。

①は、「異民族や敵国に敗れた屈辱をすっかり忘れて狩猟に夢中になっている自分の誤りに気づかせるために」が、古弼が世祖の命令に背いた理由として誤りであり、また「自分の愚かさを恥じたから」が、世祖が感心した理由としてふさわしくない。

②は、「屈強な兵士を大量に辺境に送っているために自分の要求に応えられなかった」が本文の内容と一致していないし、また「自分の不明を恥じたから」が、世祖が感心した理由としてふさわしくない。

③は、「異民族や敵国と戦い、一気に打ち破るべき時機だと考えている」が、古弼の考えと一致していない。

④は、「国家が異民族や敵国と熾烈な戦いを繰り返している今」が、古弼の指摘している情勢と一致していないし、また「狩猟にうつつを抜かしていることが大きな過ちであることを皇帝に気づかせたいと考え」が、古弼が世祖の命令に背いた理由として誤りである。